

建屋周辺の地下水位、汚染水発生量の状況 (2025年度の汚染水対策の進捗)

2026年 4月23日

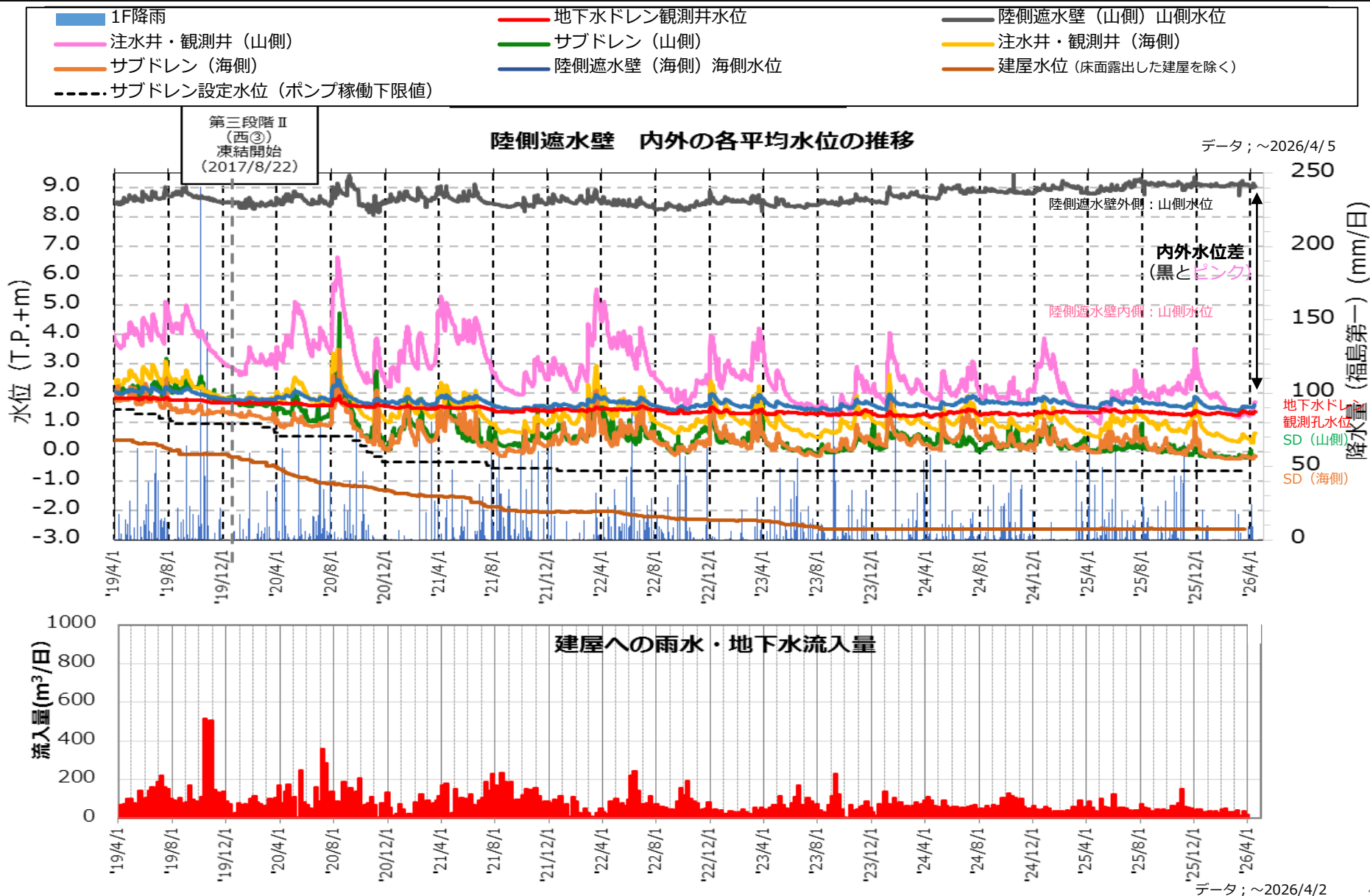
TEPCO

東京電力ホールディングス株式会社

1. 建屋周辺の地下水位、サブドレン等のくみ上げ量について	P2～3
2. 汚染水発生量について	P4～5
3. 汚染水発生量の低減対策の進捗	P6～19
参考	P20～40

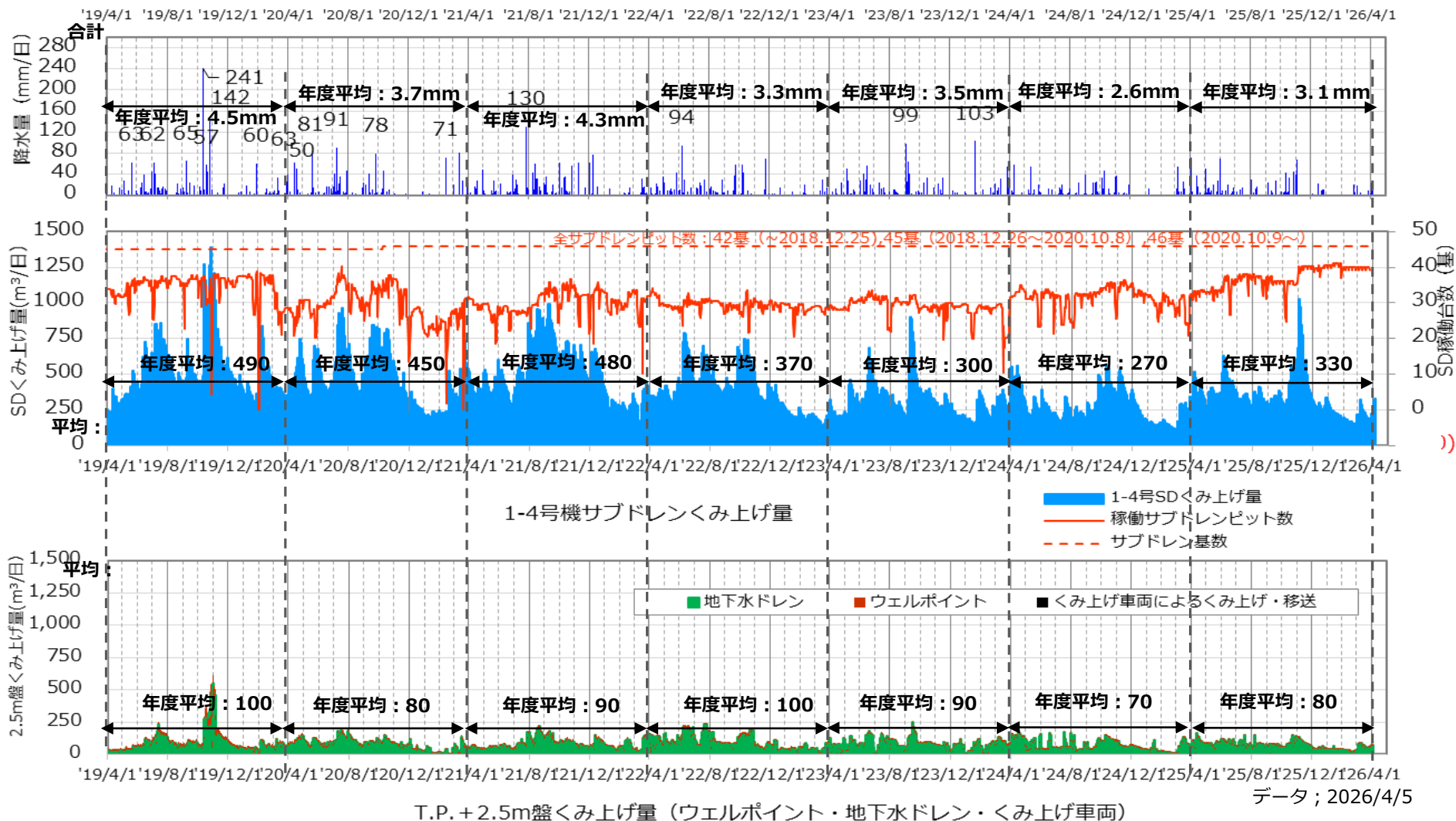
1-1. 建屋周辺の地下水位の状況

- 陸側遮水壁内側エリアの地下水位は山側では降雨による変動があるものの、内外水位差は確保した状態が維持されている
- 地下水ドレン観測井水位は約T.P.+1.4mであり、地表面から十分に下回っている（地表面高さ T.P.+2.5m）



1-2. サブドレン・護岸エリアのくみ上げ量の推移

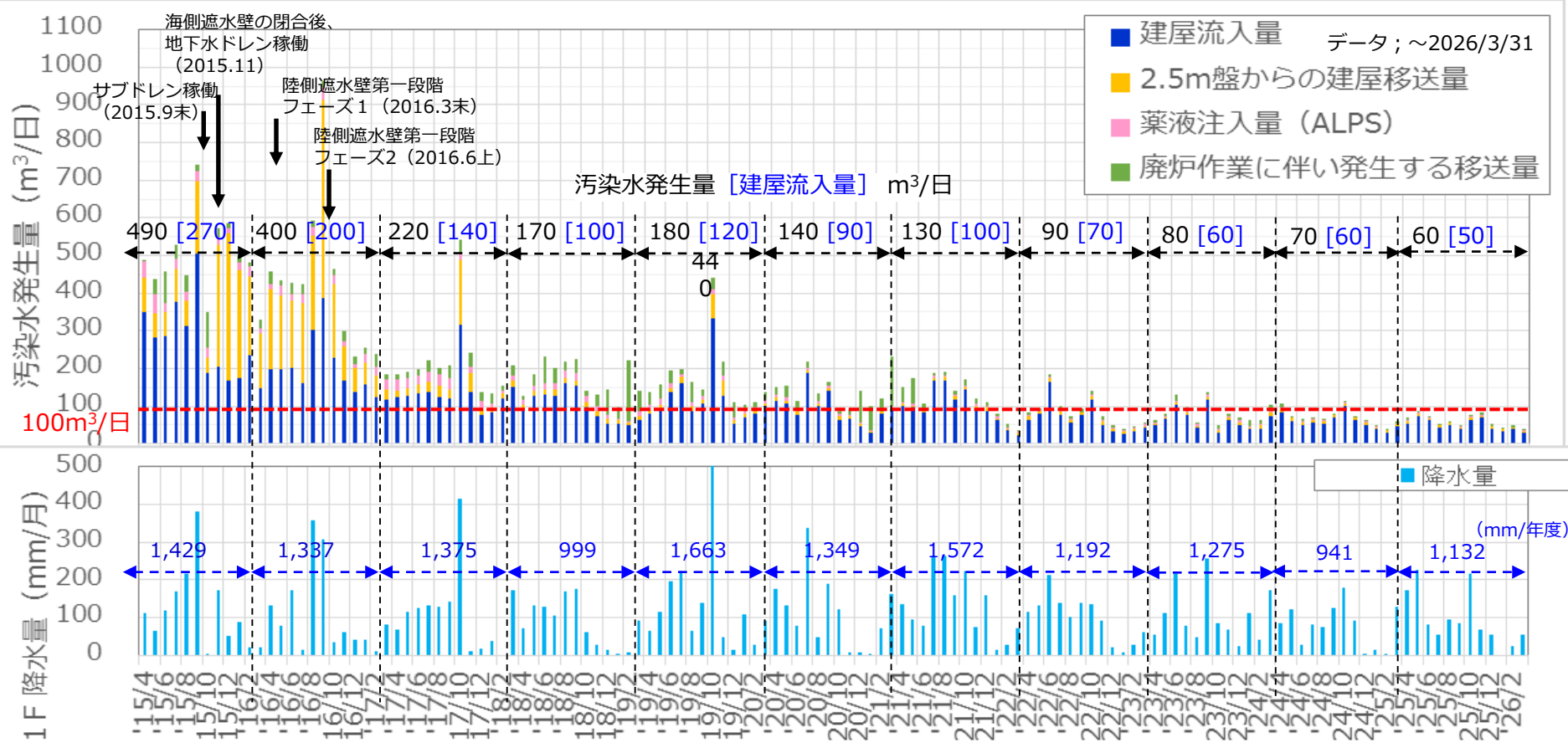
- 1-4号機サブドレンは、降水量に応じて、くみ上げ量が変動している状況である
- T.P.+2.5m盤くみ上げ量は、T.P.+2.5m盤エリアのフェーシングが完了しており、安定的なくみ上げ量で推移している状況である



※年度平均値は、降水量を除き10m³単位で四捨五入

2-1. 汚染水発生量の推移

- 重層的な汚染水対策の進捗に伴い、汚染水発生量は年々低減してきている。
- 2025年度は、汚染水発生量：約60m³/日、降雨量：1,132mmであり、平均的な降雨量（約1,470mm）と比較すると約350mm少ないが、平均的な降雨量相当だったとしても、汚染水発生量は約70m³/日程度と評価される。



注) 2017.1までの汚染水発生量（貯蔵量増加量）は、建屋滞留水増減量（集中ラド含む）と各タンク貯蔵増減量より算出しており、気温変動の影響が大きいため、2017.2以降は上表の凡例に示す発生量の内訳を積み上げて算出する方法に見直している。よって、2017.1までの発生量の内訳は参考値である。

2-2.汚染水発生量の状況について

- 2025年度の汚染水発生量は約60m³/日（2024年度：約70m³/日）と抑制対策の継続により既往最小を更に更新している。降雨量は1,132mm（2024年度：941mm）であり、平均的な降雨量約1,470mmとしても、汚染水発生量は約70m³/日（2024年度：約80m³/日）と評価される。
- その結果、2025年度以降において、2028年度までに「平均的な降雨に対して**汚染水発生量を50～70m³/日程度に抑制する**」を3年前倒しで達成したことを確認した。
- 今後は、計画した抑制対策を継続し、①建屋流入量と②2.5m盤からの建屋移送量の更なる抑制に努めていくとともに、燃料デブリの試験的取り出し（③関連）やALPS処理水2次処理（④関連）などによる影響を注視していく。

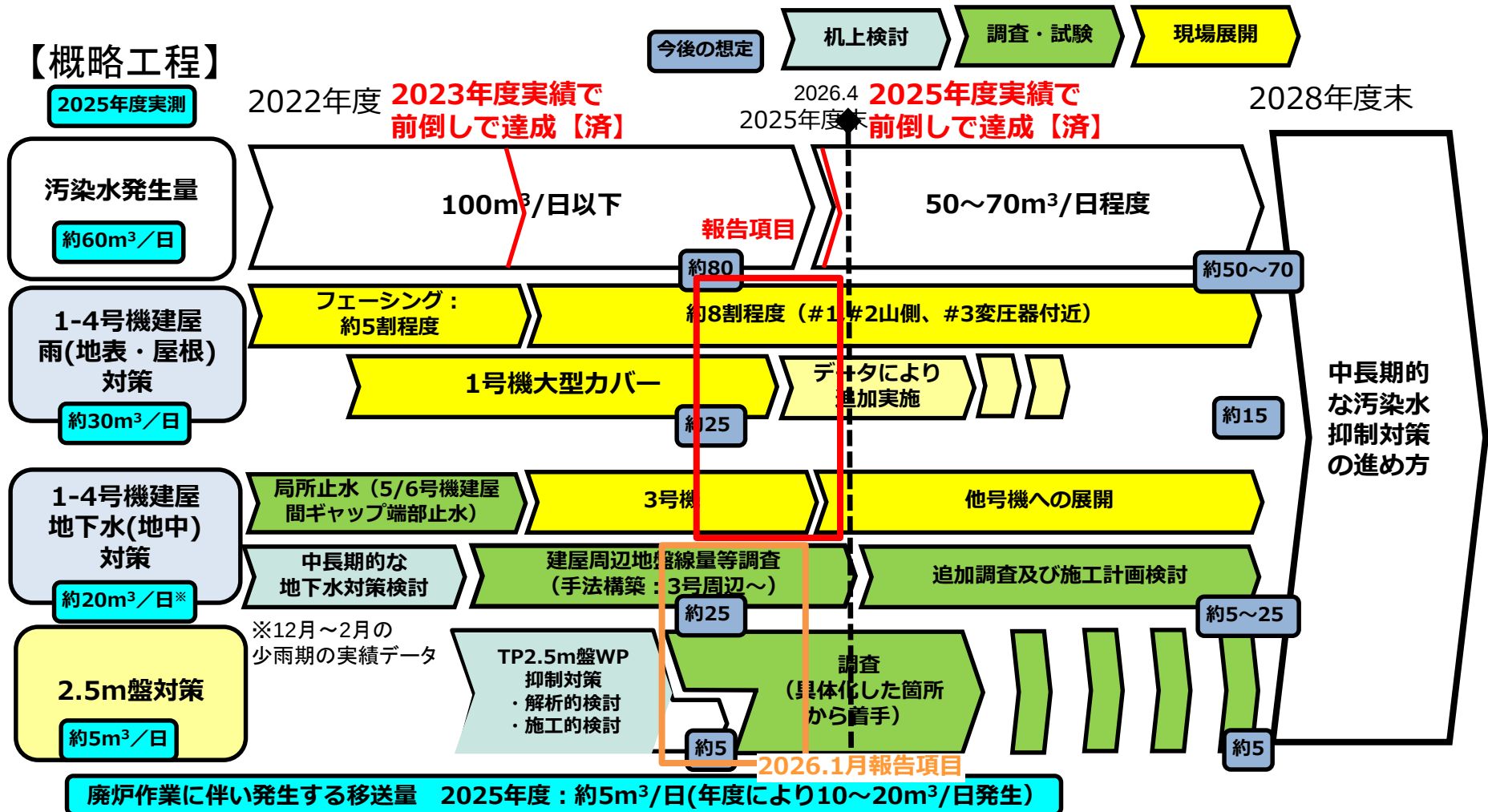
汚染水発生の要因 (項目)		2015年度 実績(m ³)※ ³	2024年度 実績(m ³ /日)	2025年度 実績(m ³)	抑制対策 (赤字：更なる汚染水発生量の 抑制に寄与する対策)
汚染水発生量		181,000 (約490m ³ /日)	約26,000 (約70m ³ /日)	約23,000 (約60m ³ /日)	
①	建屋流入量 (雨水・地下水等の流入)	約98,000 (約270m ³ /日)	約21,000 (約60m ³ /日)	約18,000 (約50m ³ /日)	○1-4雨対策 ・建屋周辺フェーシング ・1号大型カバー設置 ○1-4建屋地下水対策 ・建屋外壁局所止水 (建屋間ギャップ端部止水) ・サブドレン水位低下
②	T.P.+2.5m盤 からの 建屋移送量	約60,000 (約160m ³ /日)	約2,000 (約5m ³ /日)	約2,000 (約5m ³ /日)	サブドレン水位低下 今後計画する2.5m盤対策（検討中）
③	廃炉作業に伴い 発生する移送量※ ²	約13,000 (約35m ³ /日)	約2,000 (約5m ³ /日)	約2,000 (約5m ³ /日)	・1-4号タンク堰内雨水処理設備処理 対象水の拡大
④	ALPS浄化時 薬液注入量※ ¹	約10,000 (約25m ³ /日)	約1,000 (約5m ³ /日未満)	約1,000 (約5m ³ /日未満)	—
参考	降雨量 (mm)	1,429 (3.9mm/日)	941 (2.6mm/日)	1,132 (3.1mm/日)	約1,470 (平年相当)

※¹ 多核種除去設備の前処理設備に注入している薬液（H-3：ND）※² オペレーティングフロアへの散水や、トレンチ溜まり水の移送を含む
 ※³ 2017.1までの汚染水発生量（貯蔵量増加量）は、建屋滞留水増減量（集中ラド含む）と各タンク貯蔵増減量より算出しており、気温変動の影響が大きいため、2017.2以降は上表の凡例に示す発生量の内訳を積み上げて算出する方法に見直している。よって、2017.1以前のデータを含む2016年度実績の数値は参考値である。

3-1.汚染水抑制対策の状況について

- **現在、1-4号機建屋の雨対策としてフェーシング工事、1号機大型カバー工事(完成済み)を進めており、地下水対策は建屋間ギャップ端部止水は2025年度に3号機が完了し、4号機を実施中である。**
- 中長期的な地下水対策に関しては、建屋周辺地盤線量調査に関して、2023年度から継続しており、今回その現状結果と今後の予定を報告する。
- 2.5m盤対策（建屋への移送量抑制）は、施工的検討・解析的検討を行っており、今回短期的な対策計画を報告する。

【概略工程】

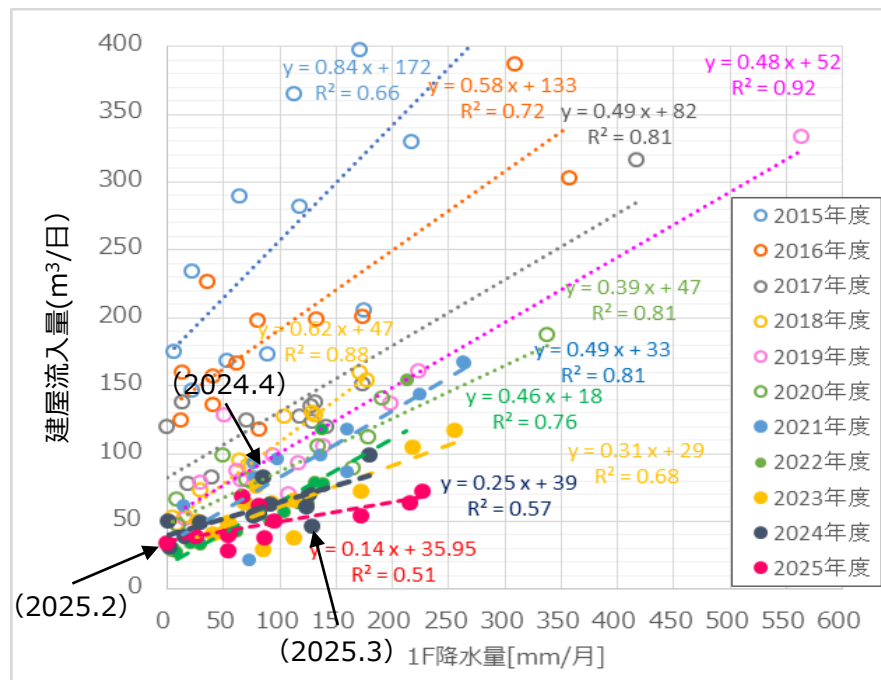


3-2. 建屋流入量及びT.P.+2.5m盤からの建屋への移送量と降雨量との関係



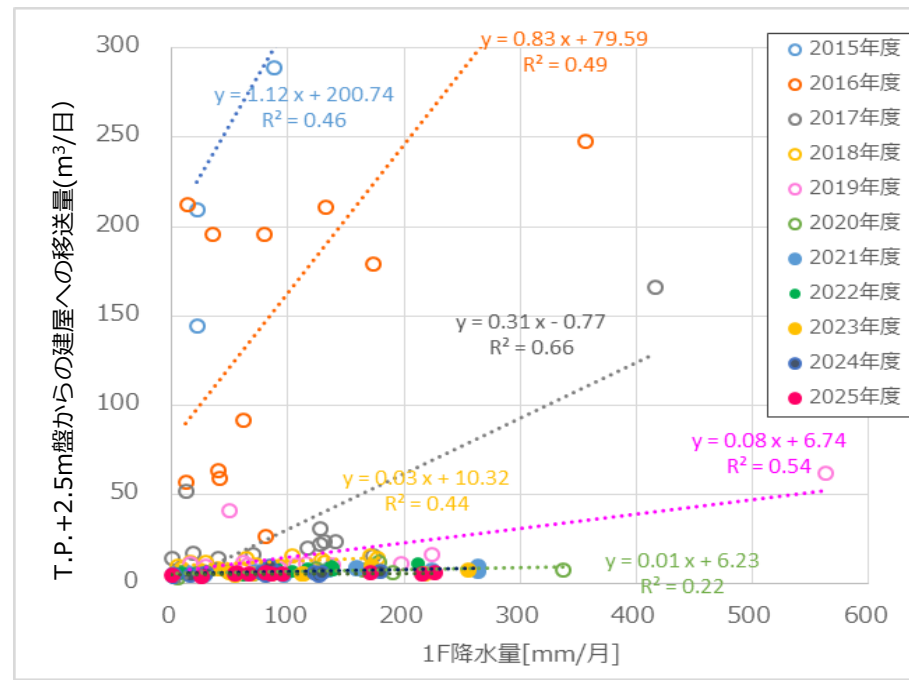
- 2025年度に関して、建屋流入量は、2024年度と比較して、局所的な建屋止水対策により降雨時の増分を含めて低減していると評価している。
- T.P.+2.5m 盤からの建屋への移送量は降雨量によらず、安定して地下水を汲み上げて運用を行っているものの更なる低減方策を検討していく。

建屋流入量



データ：2026.3.31

T.P.+2.5m盤からの建屋への移送量



データ：2026.3.31

※2020.8月データは、本設ポンプによる移送に伴う
建屋流入量のバラツキを考慮して、回帰分析において除外
している。

3-3.1 - 4号機フェーシングの進捗状況

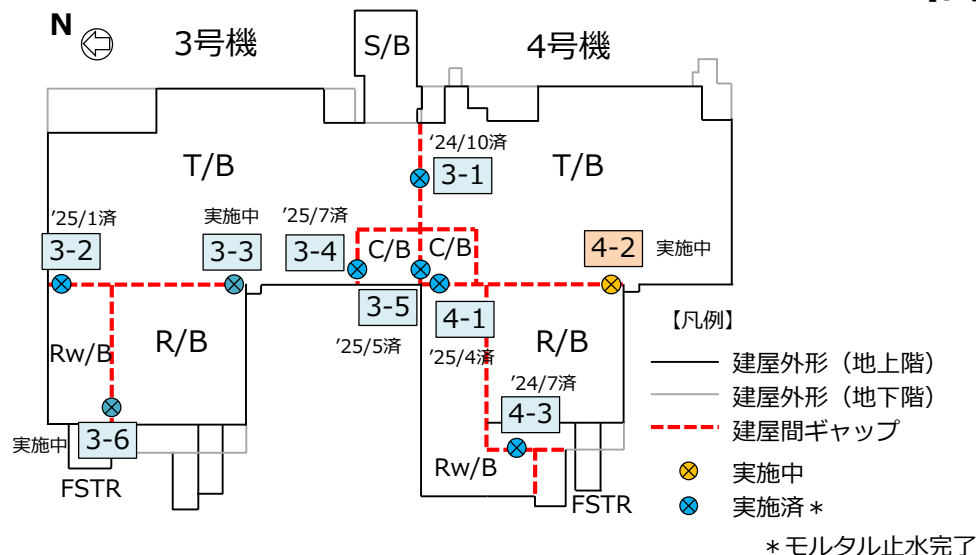
- 1-4号機建屋周辺のフェーシングは、2号機R/B西側エリア及び1・2号機海側のエリアを実施した。
- 2026年度は、3号機R/B南側エリアで変圧器撤去後にフェーシングを計画中（実施時期等調整中）
- 建屋屋根がれき撤去に関しては、4号T/B下屋が完了（海側アクセスで取り切れない範囲は、今後山側から撤去を検討（3/4号機排気筒撤去後を予定。それまでは、集中RW/Bエリアの屋根を清掃予定））



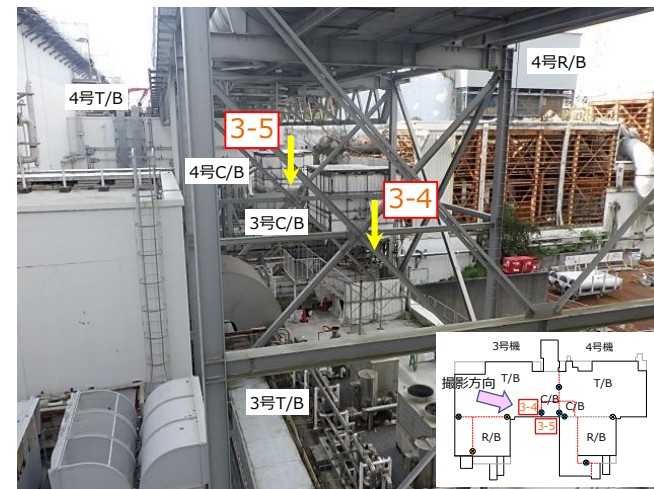
3-4. 建屋間ギャップ端部止水対策の状況

- 3号機：全6箇所のうち、4箇所完了。残り2箇所は、2026年2月止水（モルタル充填）完了（ポリバグインは品質確保のために冬季を避けて2026年4月以降充填予定）
- 4号機：全3箇所のうち、2箇所完了（3号機工事と合わせて実施）。残り1箇所について実施中。
- 1, 2号機：2026年度より着手し、2028年度内を目途に実施予定

【ギャップ端部止水実施箇所と進捗】



【3号機建屋間ギャップ端部止水実施状況（3-4、3-5）】

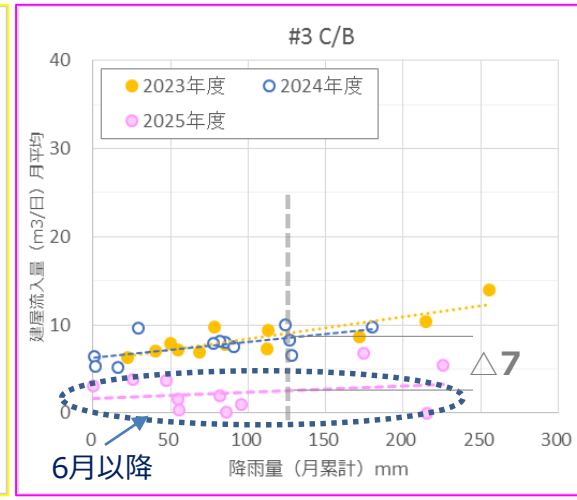
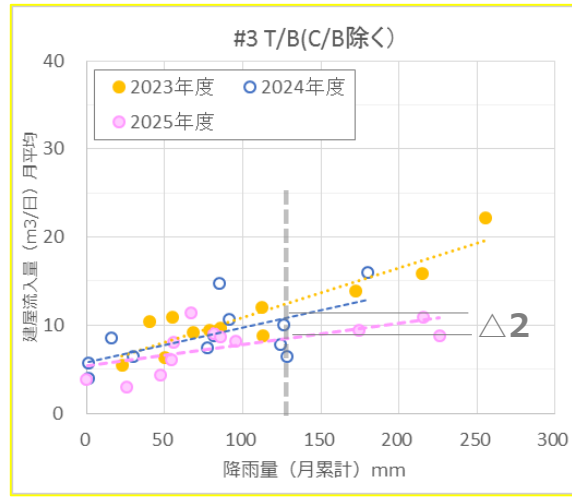
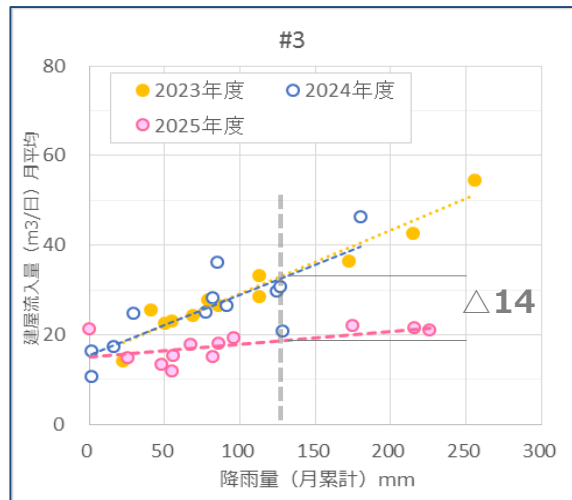


【今後の予定】

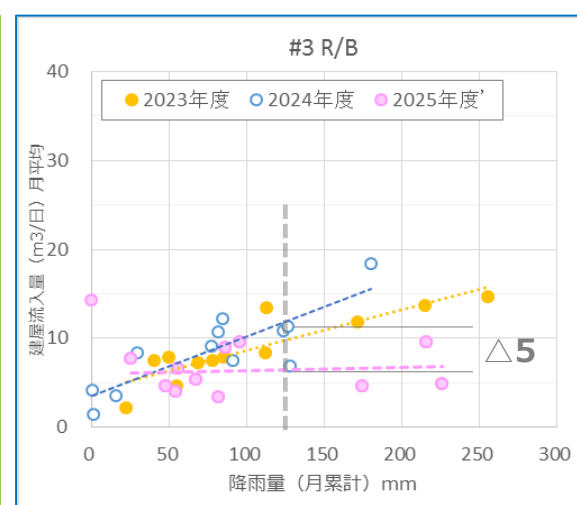
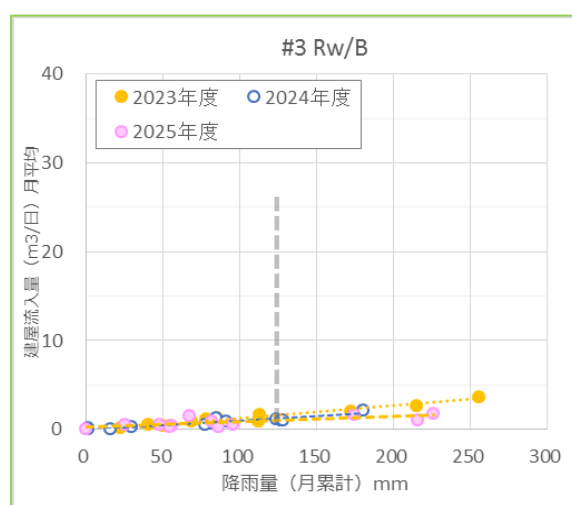
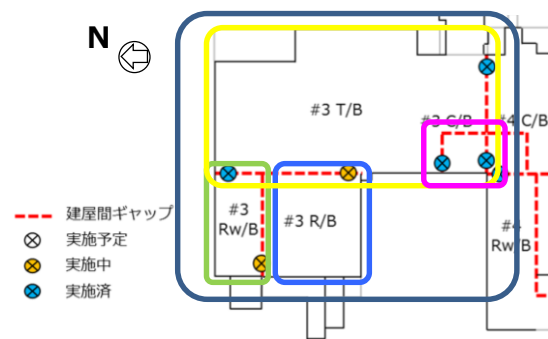
		2025年度										2026年度		2027年度		2028年度	
		6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	上期	下期	上期	下期	上期	下期
3号機	3-3																
	3-6																
4号機	4-2																
1・2号機																	

3-5. 3号機建屋間ギャップ端部止水の効果について

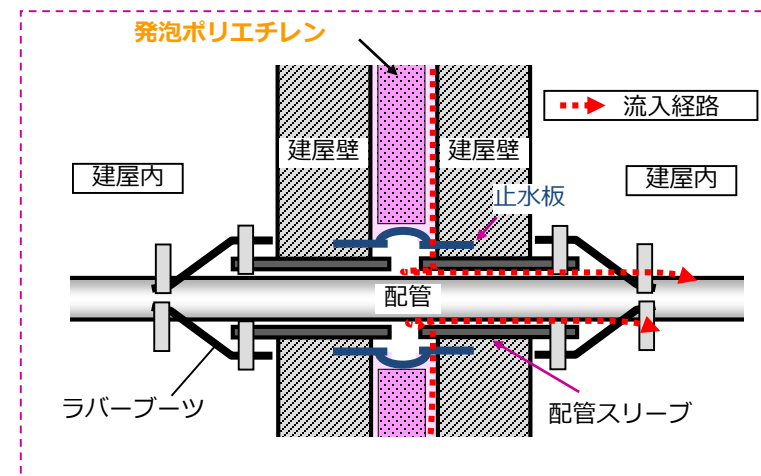
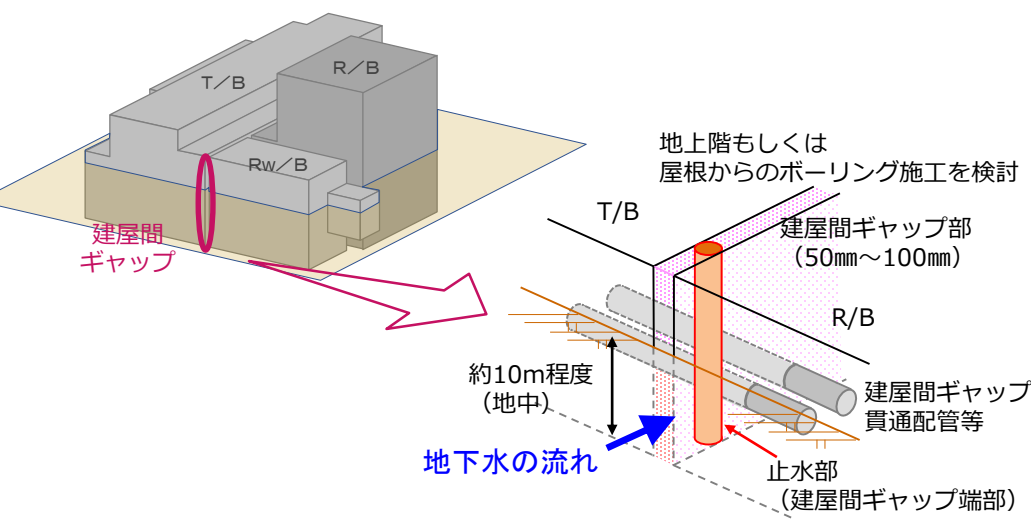
- 3号機の建屋流入量は、ギャップ端部止水の進捗に伴い約10m³/日程度の低下が確認されている。
- T/B：数m³/日程度の低減。2025年度は、降雨による増加が殆どない状況 ※比較は、2024年度と2025年度
- C/B：約5m³/日程度の低減。6月以降のデータでは、流入量が数m³/日である。（ギャップ完了）
- Rw/B：殆ど変化無し。ギャップ止水を実施中のため、今後、データを確認していく
- R/B：短時間の強い降雨による一時的な流入量増加があるものの、約5m³/日程度の低減



【降雨量】 (平年雨量)
 2023年度：1,275mm (1,470mm)
 2024年度：941mm
 2025年度：1,132mm
 <平年雨量の月平均> 1,470/12ヶ月：123mm



- 各建屋との建屋間には50～100mmのギャップ（隙間）が存在し、発泡ポリエチレンが設置されている。建屋間ギャップには、多数の貫通配管が存在しているため、外壁部から地下水が浸入している可能性が考えられることから、端部に止水部を設置する。
- 建屋間ギャップは、概ね底部に止水板が設置されており、外壁端部の範囲をボーリングで削孔し、削孔箇所にモルタル等で止水部を構築する予定である。
- 建屋間ギャップ端部止水の実績などを踏まえて、中長期的な汚染水対策の進め方など（陸側遮水壁、サブドレン含む）を検討していく予定である。



建屋間断面図

建屋間ギャップ端部止水イメージ

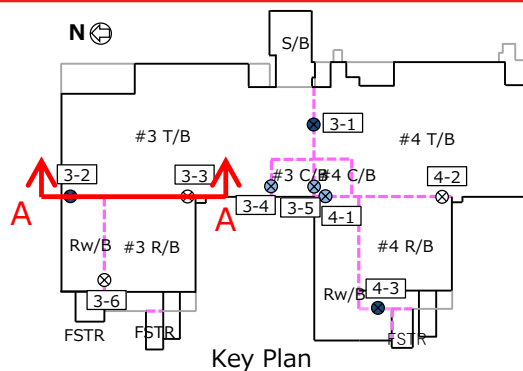
建屋間ギャップとは？

原子炉建屋周辺の建屋同士を隣接して建設する際に生じる外壁間の50～100mmの隙間の事である。建屋間ギャップ内には、先行建屋外壁に発泡ポリエチレンが設置されており、地下水が地盤側から建屋間ギャップに浸入すると配管等貫通部から建屋内に地下水が流入する可能性が考えられる。



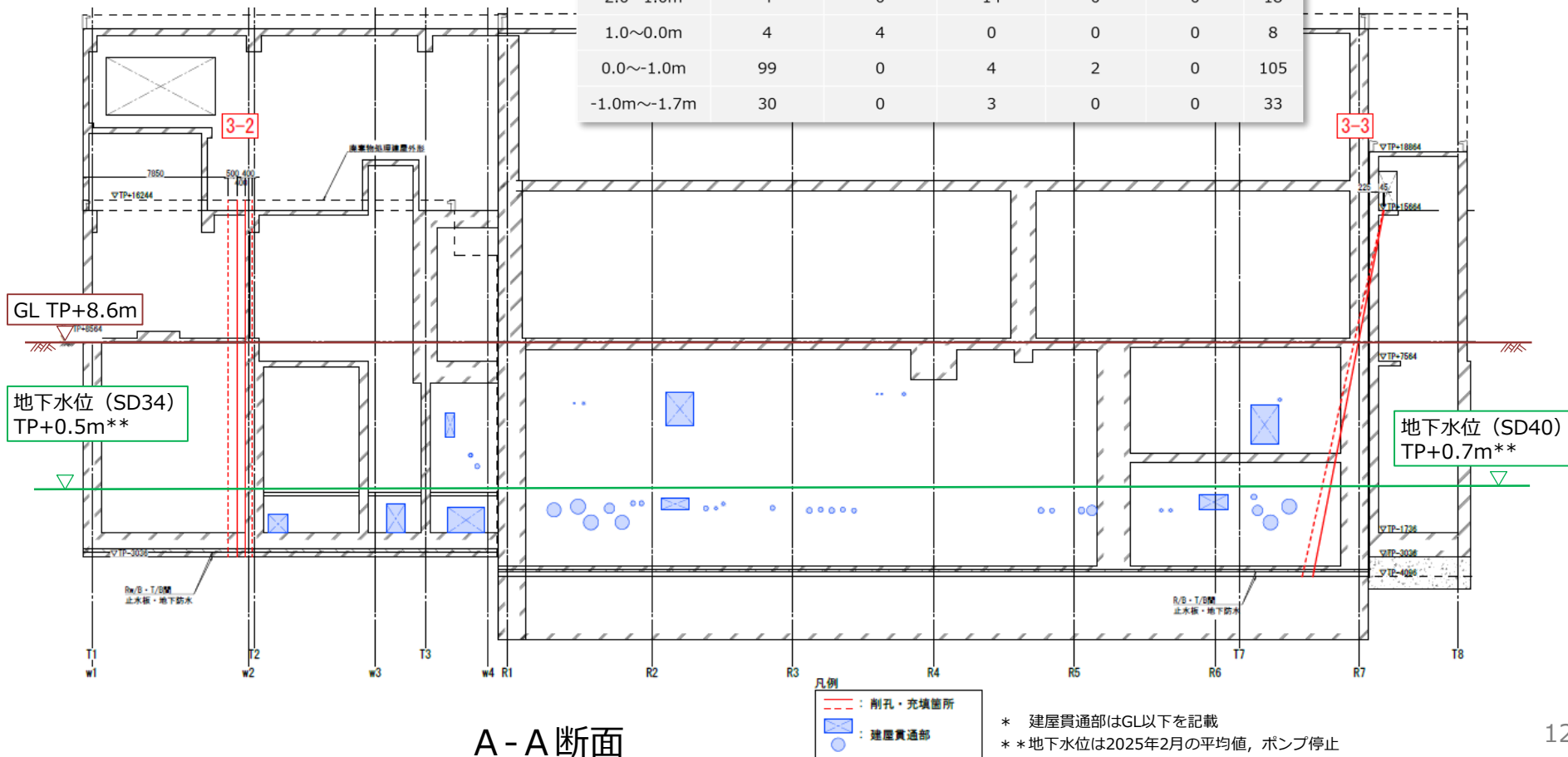
発泡ポリエチレン

【参考】3号機R/BとT/B間及びRw/BとT/B間貫通部及びギャップ端部止水位置図 **TEPCO**



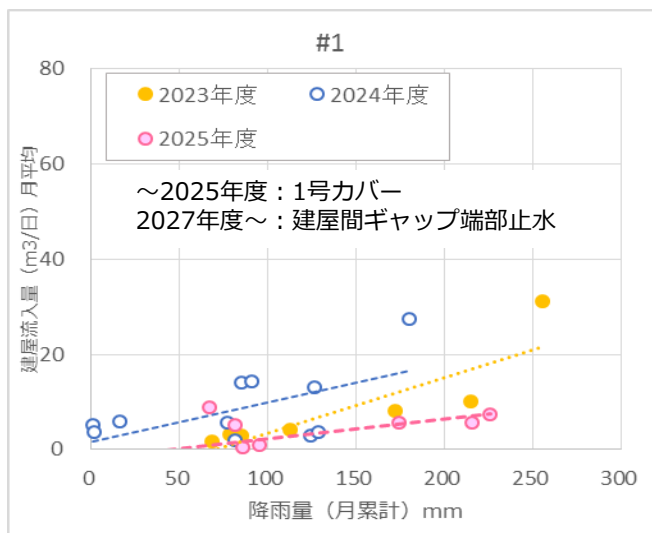
【貫通部の深度分布（箇所数）】

	3T/B～ 3Rw/B,3R/B	3R/B～3Rw/B	3C/B～3T/B	3C/B～4C/B	3T/B～4T/B	
主な対象ギャップ止水	3-2、3-3	3-6	3-4	3-5	3-1	計
合計	196	90	62	12	10	370
TP ～6.0m	0	76	0	0	8	84
6.0～5.0m	28	4	16	6	2	56
5.0～4.0m	6	4	6	2	0	18
4.0～3.0m	16	2	6	0	0	24
3.0～2.0m	9	0	13	2	0	24
2.0～1.0m	4	0	14	0	0	18
1.0～0.0m	4	4	0	0	0	8
0.0～-1.0m	99	0	4	2	0	105
-1.0m～-1.7m	30	0	3	0	0	33

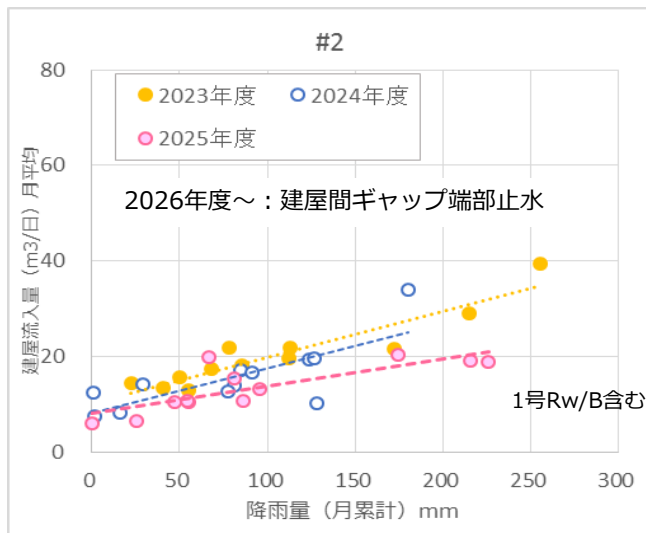


3-6. 建屋流入量（号機別）について

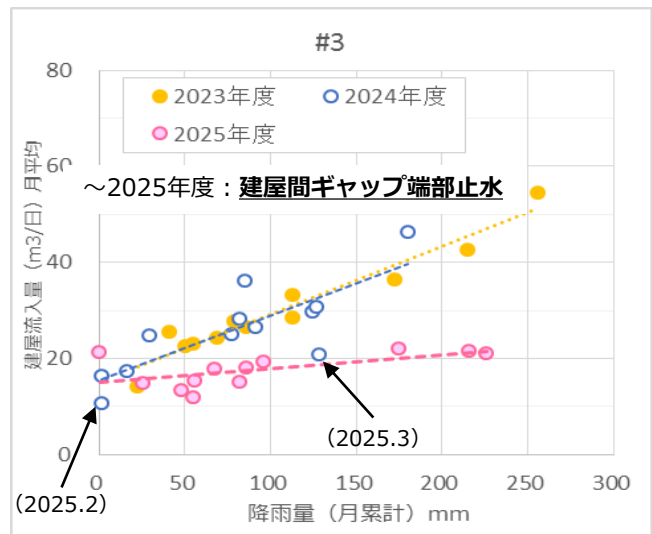
- 建屋間ギャップ端部止水対策を進めて行くことにより、3号機以外についても建屋流入量の低減状況を確認していく。（1号機については、PCV水位低下、炉注変更の影響が含まれている）



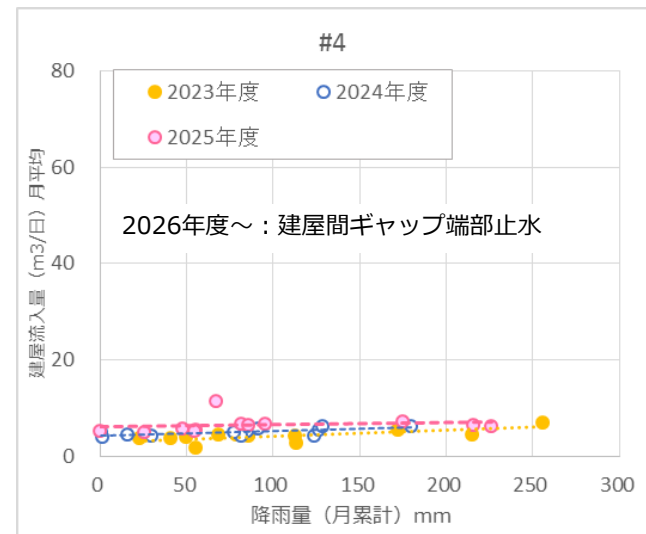
2023年度: 4m³/日、2024年度: 9m³/日
2025年度: 4m³/日



2023年度: 20m³/日、2024年度: 16m³/日
2025年度: 13m³/日



2023年度: 30m³/日、2024年度: 26m³/日
2025年度: 18m³/日



2023年度: 4m³/日、2024年度: 5m³/日
2025年度: 7m³/日

（建屋流入量の発生推定要因）

- ✓ 地下水: 切片の値
- ✓ その他（雨水等）: 勾配×降雨量

1-4号機建屋流入量（週報値）

2023年度: 約60m³/日

2024年度: 約60m³/日

2025年度: 約50m³/日

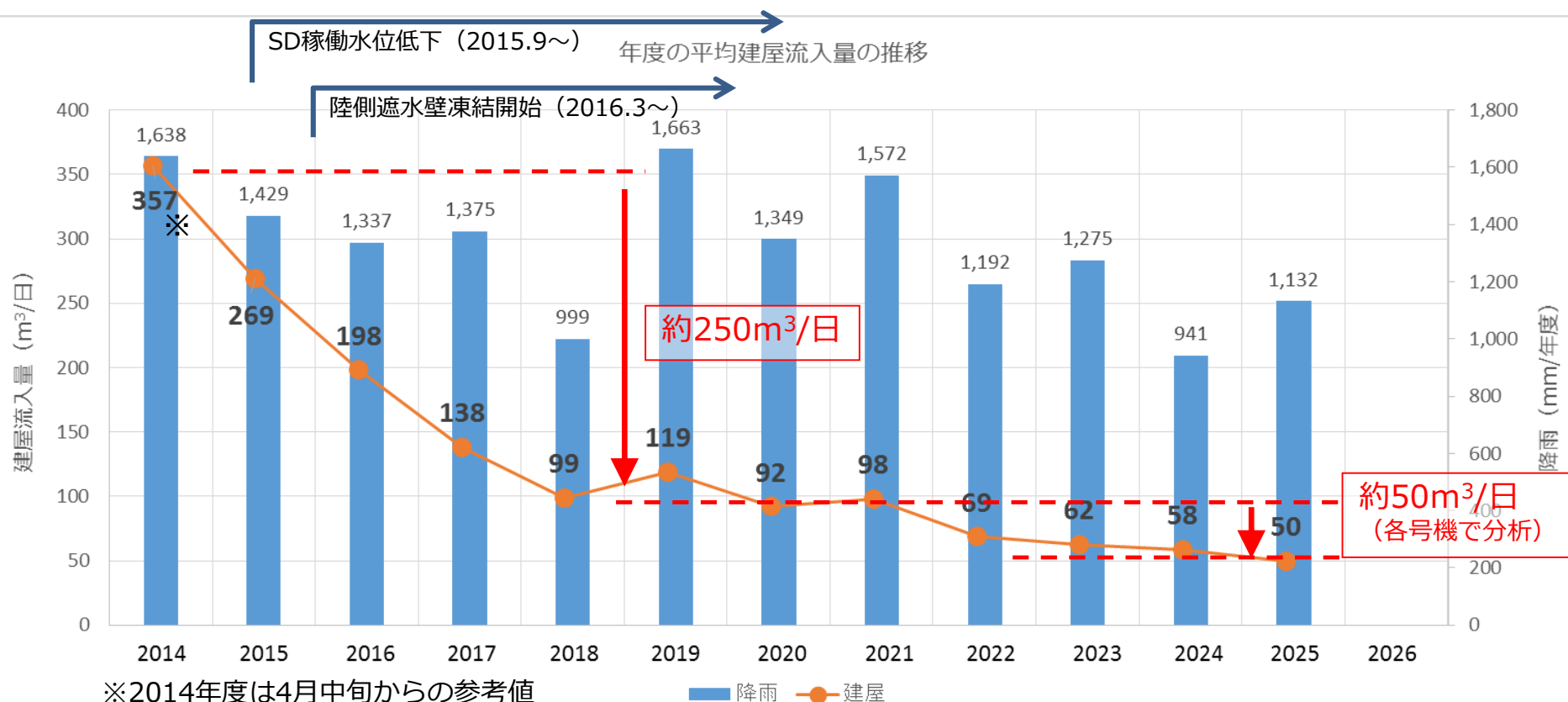
●各号機毎の建屋流入量は、公表値（週報値）とは試算に用いた計器が異なるため各建屋の合計値と公表値は合致しない状況である。

グラフデータ: ~2026/3/31迄
※年度、年平均値は、雨補正なし

**2025年度までの1-4号建屋への雨水・地下水流入量の
推移と汚染水対策について**

3-7. 1-4号機建屋への雨水・地下水流入量の推移

- 1-4号機建屋流入量全体の内、全号機を対象に対策を実施した、サブドレン稼働及び水位低下と陸側遮水壁の凍結により、約350m³/日程度（2014年度）から約100m³/日程度まで約250m³/日の抑制効果が確認される。
- 2022年度以降、更に約50m³/日の抑制効果が確認されるが、各号機周辺の対策について着目する（次頁）



3-8. 各号機の建屋流入量の推移

■ 各号機の建屋流入量は、各建屋に水位計、ポンプを設置した2018年度から計測している。

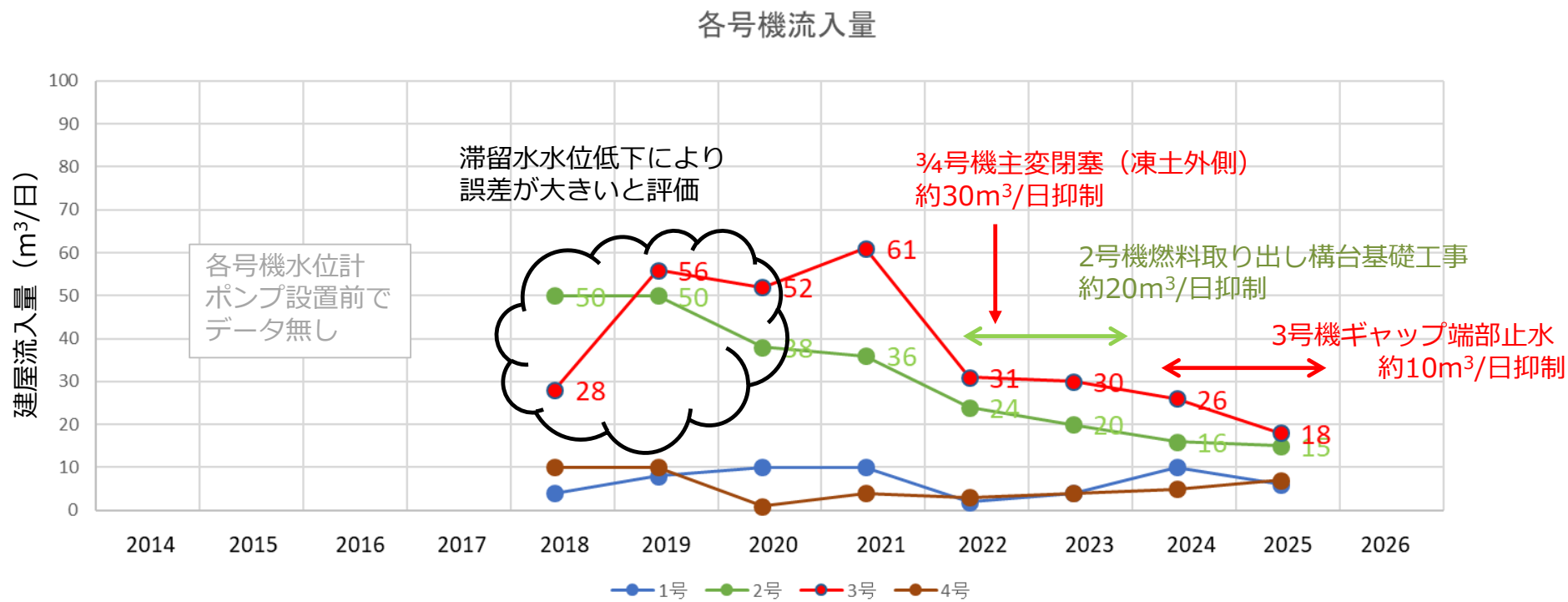
■ 特徴は下記の通り

● 1号機：2018年度から大きな変動なし：今後1号機大型カバー設置効果確認

● 2号機：2021年度～2023年度にかけて約20m³/日抑制（2号機燃料取り出し構台基礎工事実施）

● 3号機：2022年度に約30m³/日程度抑制（3/4号主変閉塞（陸側遮水壁外側））

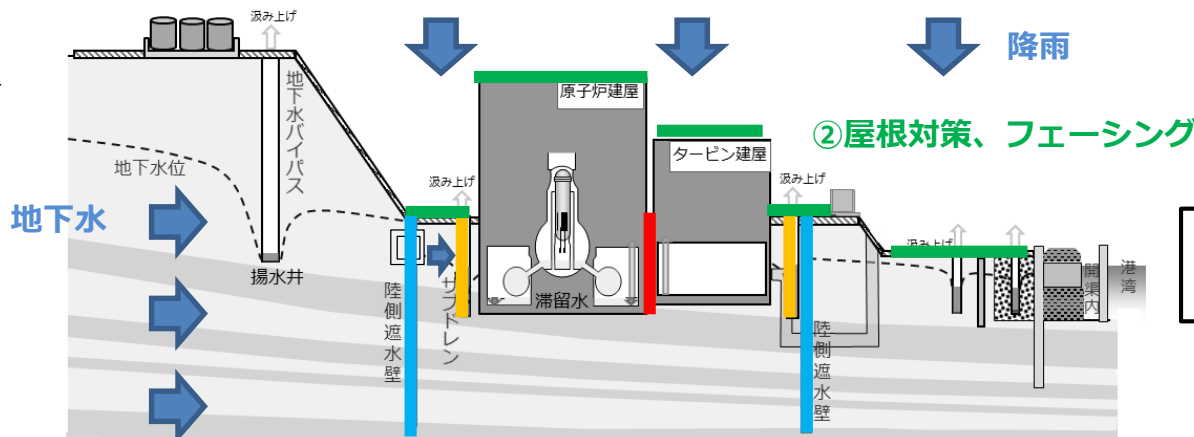
2024年度～2025年度に約10m³/日抑制（3号機ギャップ端部止水）



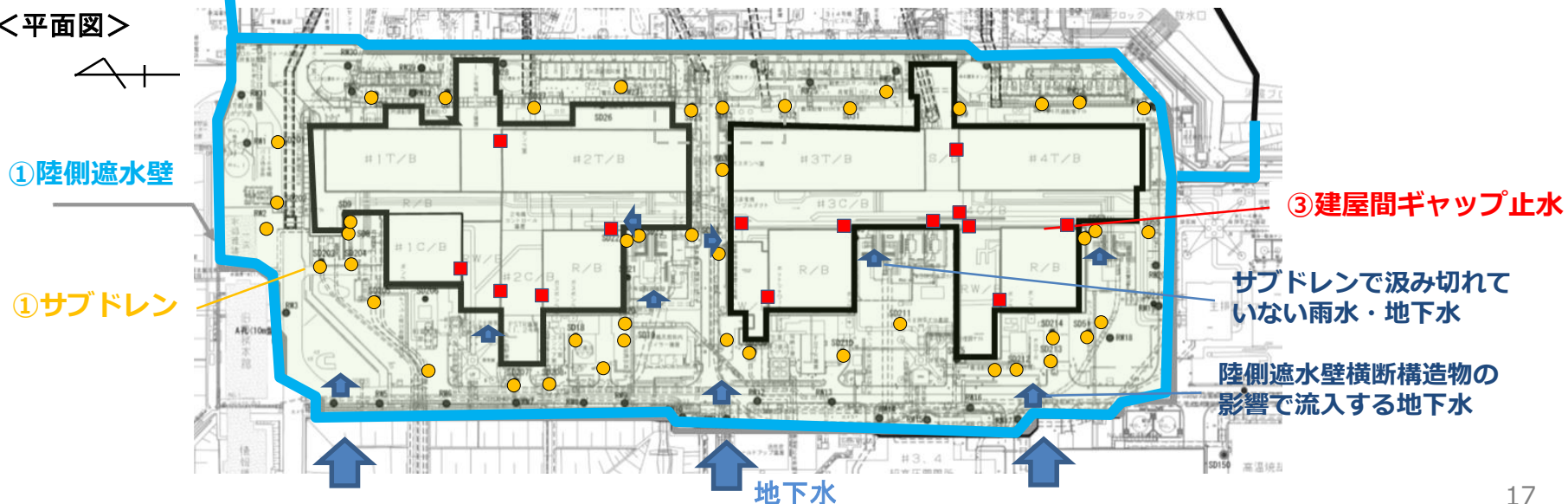
3-9. 建屋への雨水・地下水流入及び対策イメージ

- ①山側から常時流れる地下水について**陸側遮水壁**を設置して建屋近傍への流入を大幅に抑制し、**サブドレン**にて滞留水の水位より高い水位で汲み上げ、地下水位をコントロールし、建屋への流入を抑制している。
- ②更に1-4号機周辺の降雨対策として、**屋根対策**、**フェーシング**を実施し、建屋への雨水流入及び地下水位の上昇を抑制している。
- ③加えて、建屋間の貫通構造物を介して建屋へ流入する雨水・地下水について**建屋間ギャップ止水**で抑制している。

<断面図:東西>

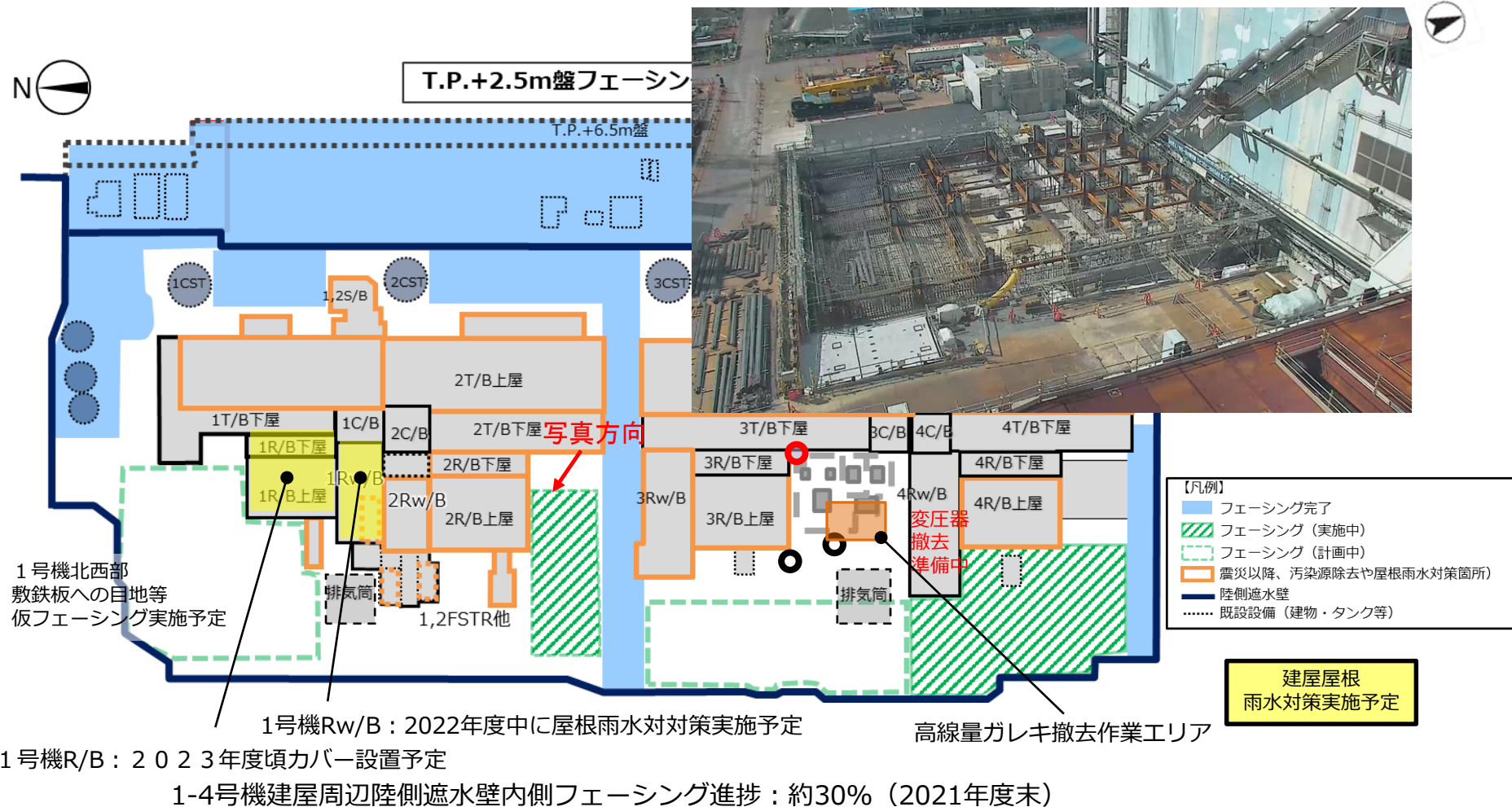


<平面図>

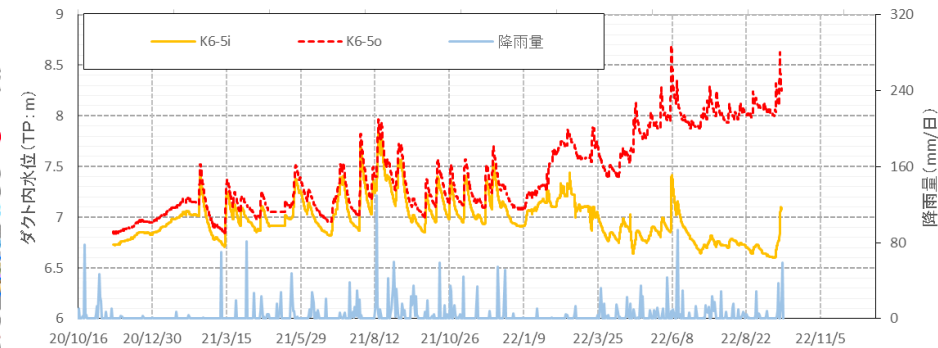
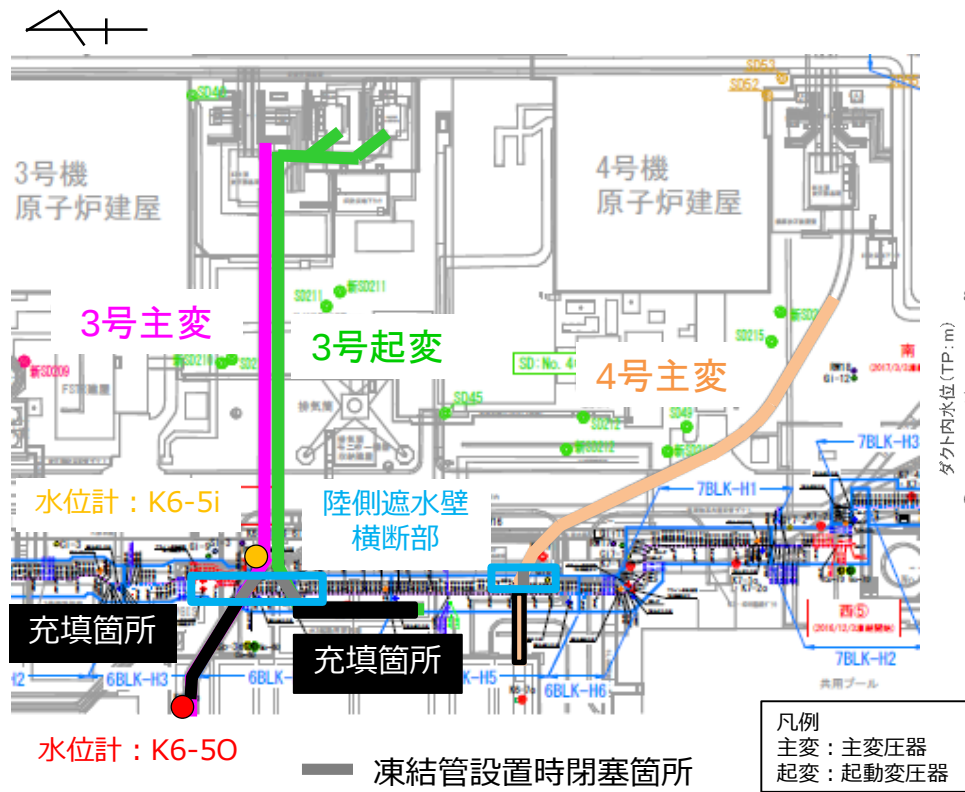


- 2号機R/B南側フェーシング範囲 (斜線緑)) は、2号機燃料取り出し用構台設置エリアであり、構台の基礎構築部を事前に地盤改良を実施している。

- 2号機R/B南側エリア 状況写真 (2022.9.28)
建物基礎部に地盤改良を実施



- 3号主変ケーブルダクトと陸側遮水壁との横断部においては、凍結管の貫通施工時に閉塞工事を実施しており、その後、補助的に追加の閉塞工事を2021年度に行った。
- その結果、ダクト内で計測している水位に内外水位差が発生していることから、当該ダクトを介した陸側遮水壁の外側から内側への水供給は抑制していると評価している。



【参考 1】地中温度分布

■ 地中温度分布図

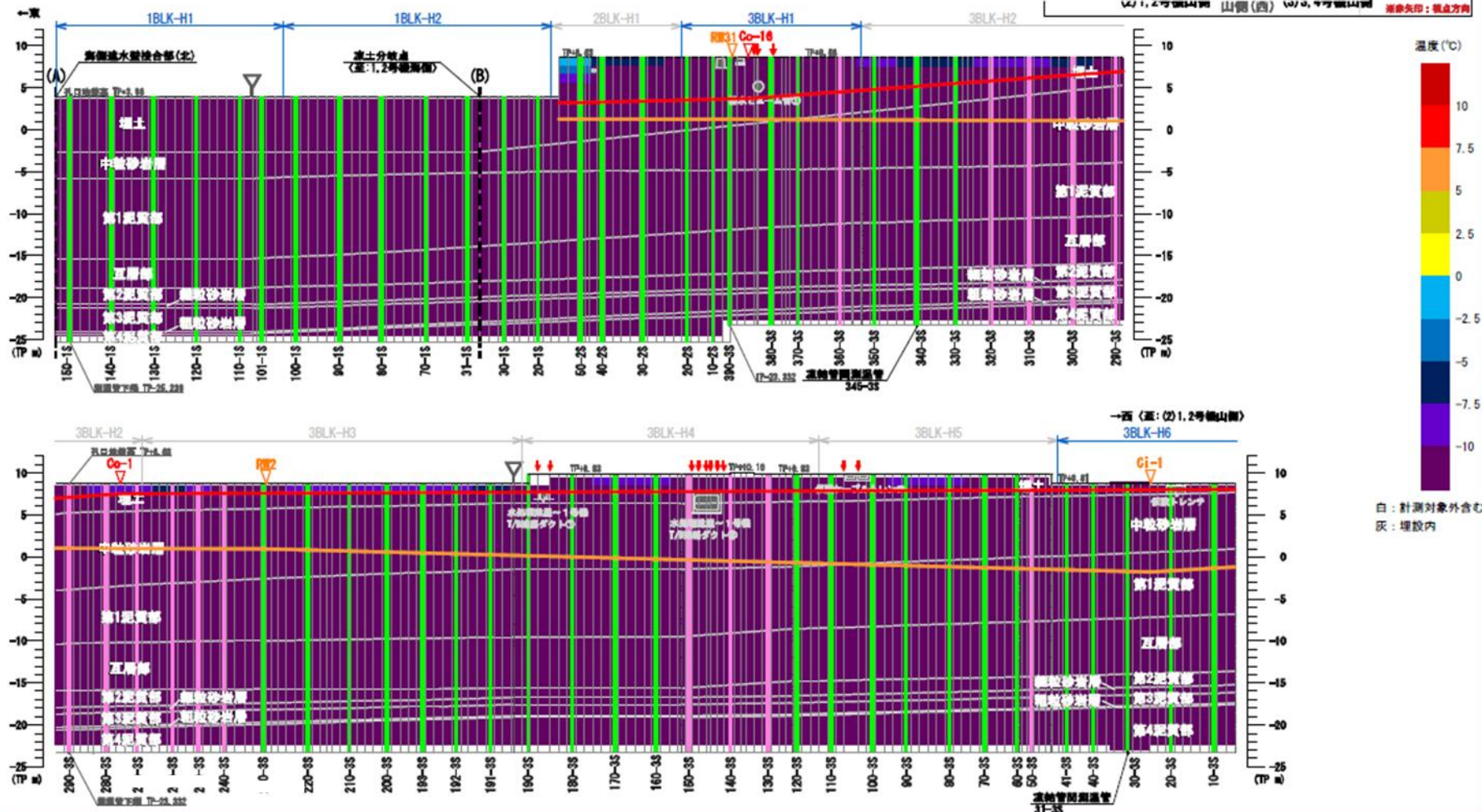
(1) 1号機北側（北側から望む）

（温度は4/14 7:00時点のデータ）

凡例

- 測温管（凍土ライン外側）
- 測温管（凍土ライン内側）
- 複列部凍結管
- 凍土壁外側水位
- 凍土壁内側水位
- △ R/R（リチャージ Jewel）
- △ CI（中粒砂岩層 - 内側）
- △ Co（中粒砂岩層 - 外側）
- ▽ 凍土折れ点
- ⇔ プライン設置範囲
- ⇔ プライン停止範囲

KEY PLAN



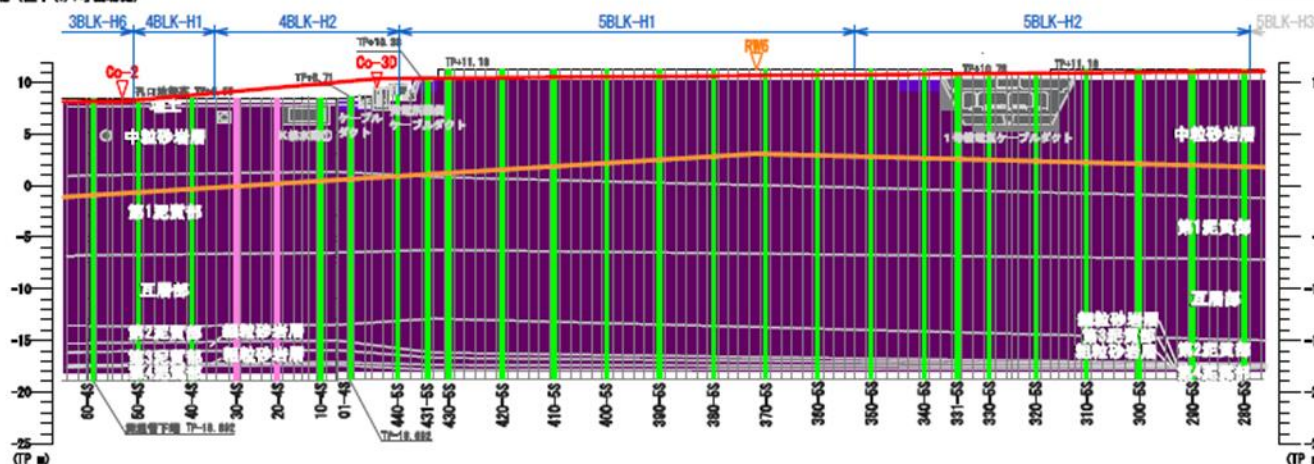
■ 地中温度分布図

(2) 1,2号機山側（西側から望む）

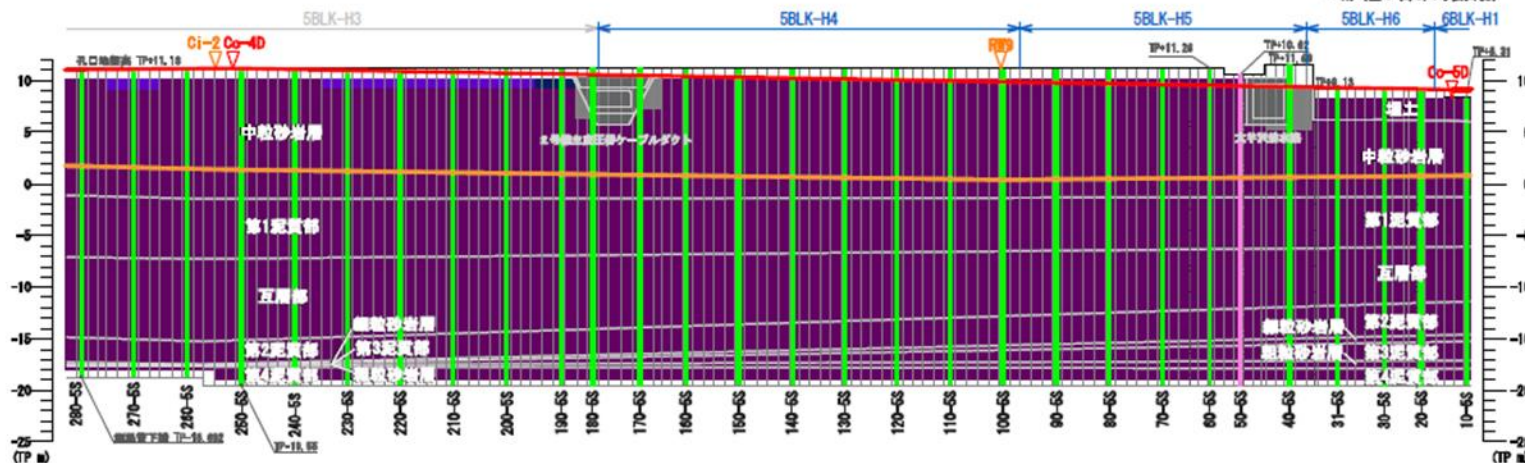
（温度は4/14 7:00時点のデータ）



←北（注：(D)1号機北側）



→南（注：(C)3,4号機山側）

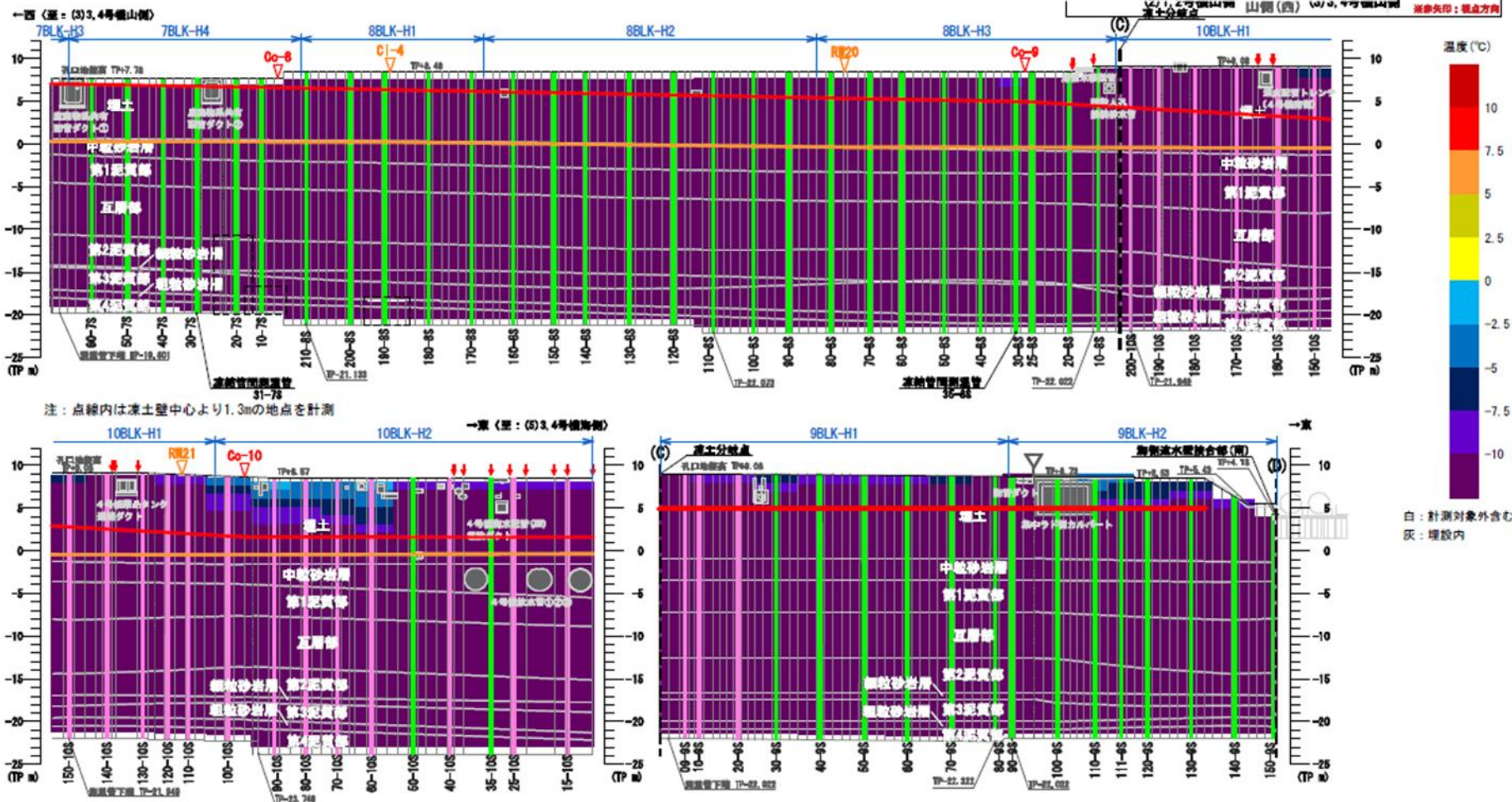


白：計測対象外含む
灰：埋設内

■ 地中温度分布図

(4) 4号機南側（南側から望む）

（温度は4/14 7:00時点のデータ）



【参考 1 - 5】地中温度分布図（3・4号機東側）

■ 地中温度分布図

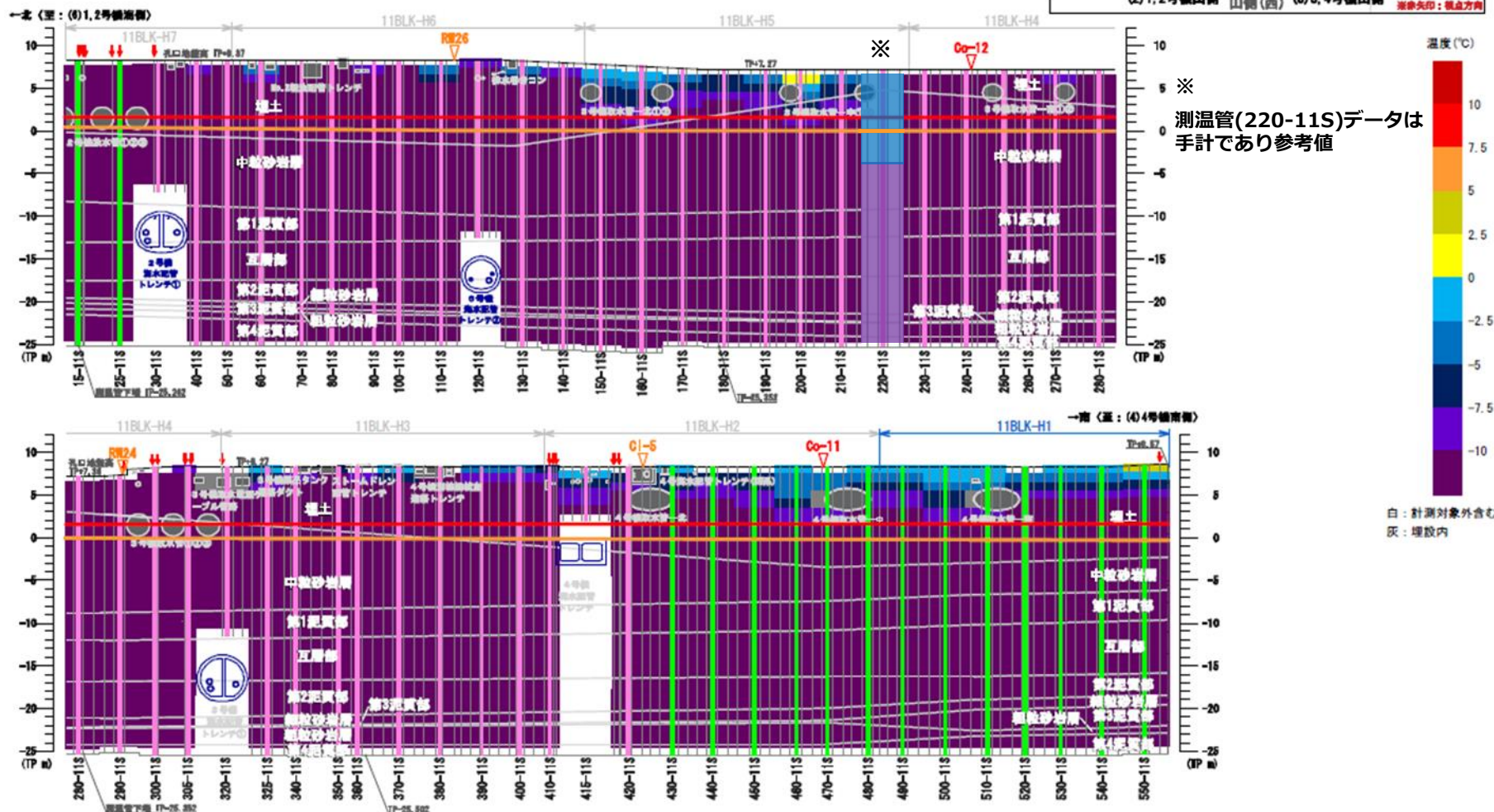
(5) 3, 4号機海側（西側：内側から望む）

（温度は4/14 7:00時点のデータ）

凡 例

- 測温管（凍土ライン外側）
- 測温管（凍土ライン内側）
- 複列部凍結管
- 凍土壁外側水位
- 凍土壁内側水位
- △ : 障（リチャージ Jewel）
- △ : CI（中粒砂岩層 - 内側）
- △ : Co（中粒砂岩層 - 外側）
- ▽ : 凍土折れ点
- ⇄ : プライン稼働範囲
- ⇄ : プライン停止範囲

KEY PLAN



■ 地中温度分布図

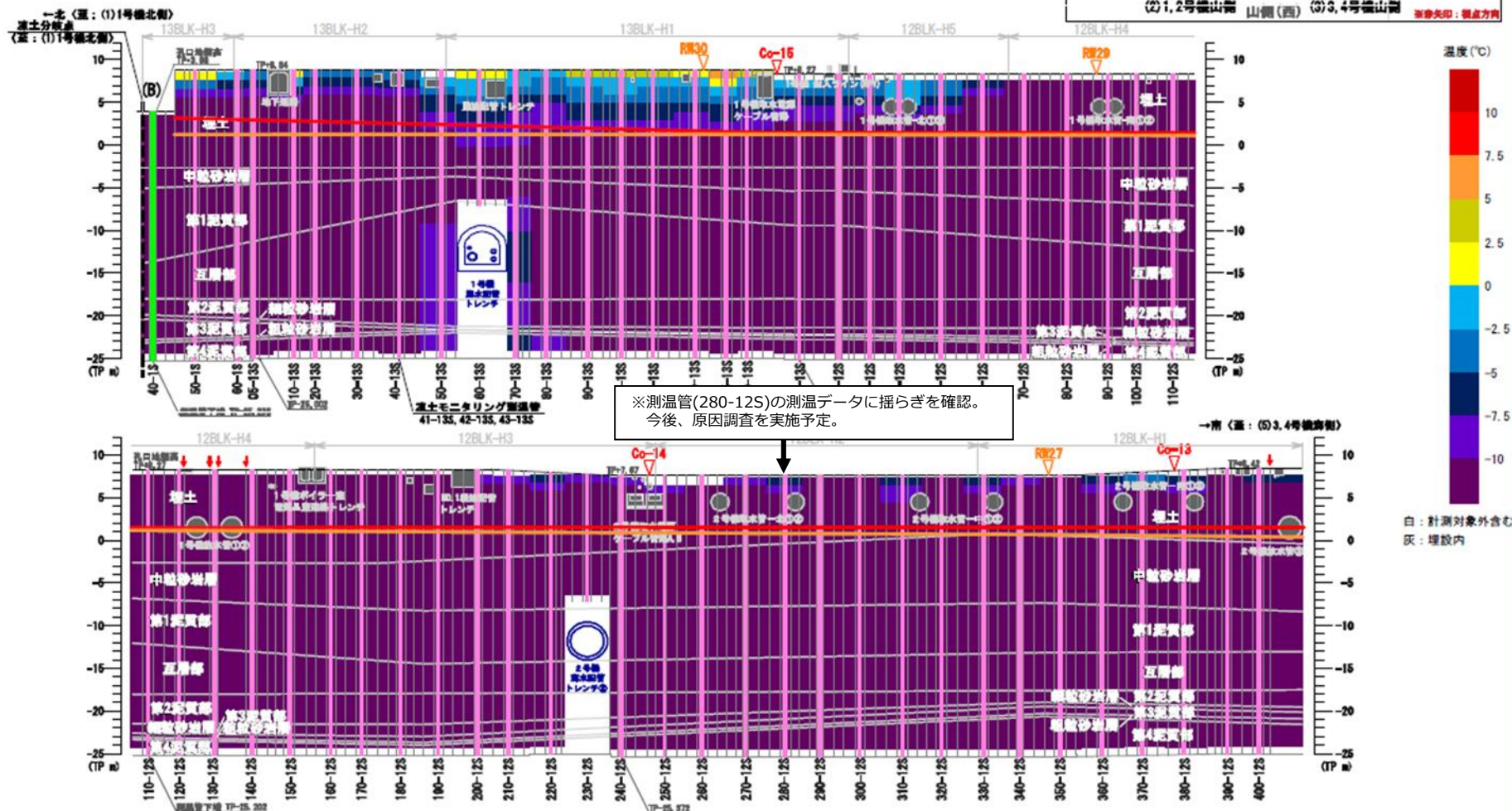
(6) 1,2号機海側（西側：内側から望む）

（温度は4/14 7:00時点のデータ）

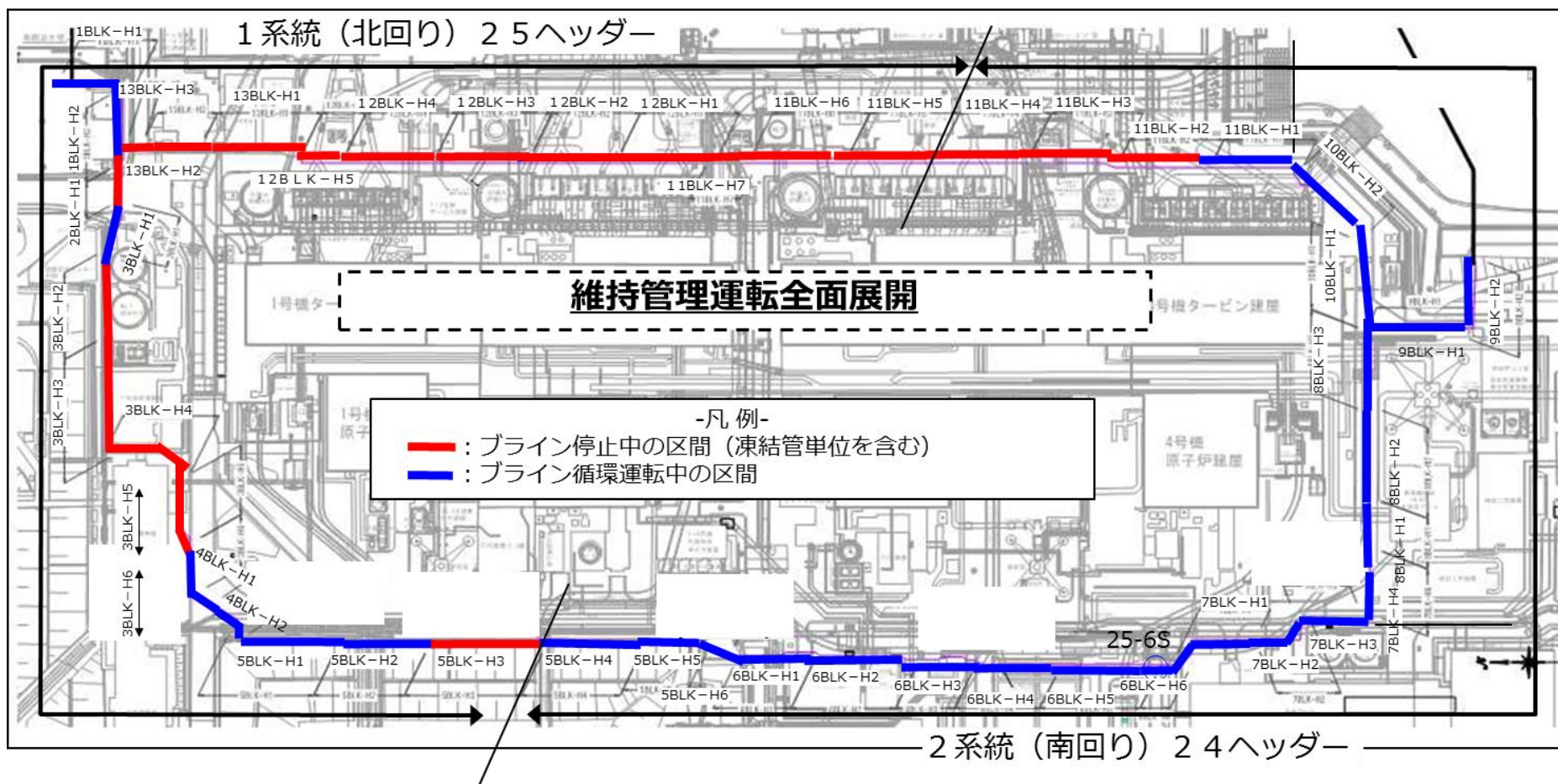
凡 例

- 測温管（凍土ライン外側）
- 測温管（凍土ライン内側）
- 複列部凍結管
- 凍土壁外側水位
- 凍土壁内側水位
- △ R/R（リチャージウェル）
- △ CI（中乾砂岩層・内側）
- △ Co（中乾砂岩層・外側）
- ▽ 凍土折れ点
- ⇔ プライン稼働範囲
- ⇔ プライン停止範囲

KEY PLAN

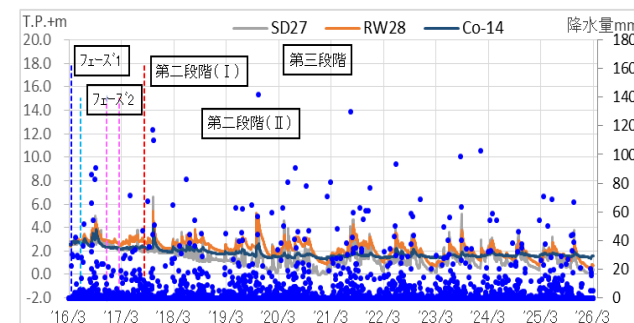
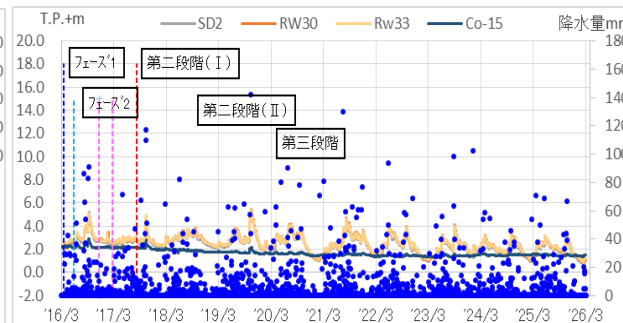
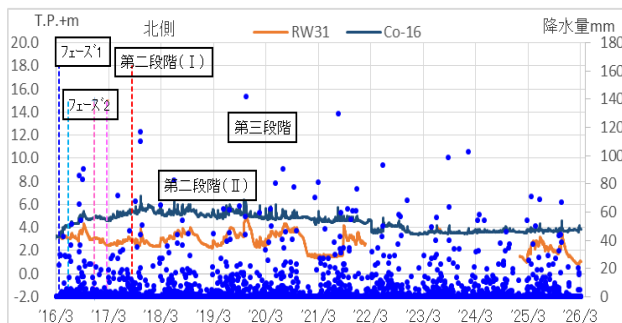


- 維持管理運転対象全49ヘッダー管（北回り 1 系統25ヘッダー、南回り 2 系統24ヘッダー）のうち20ヘッダー管（北側5, 東側14, 南側0, 西側1）にてブライン停止中。

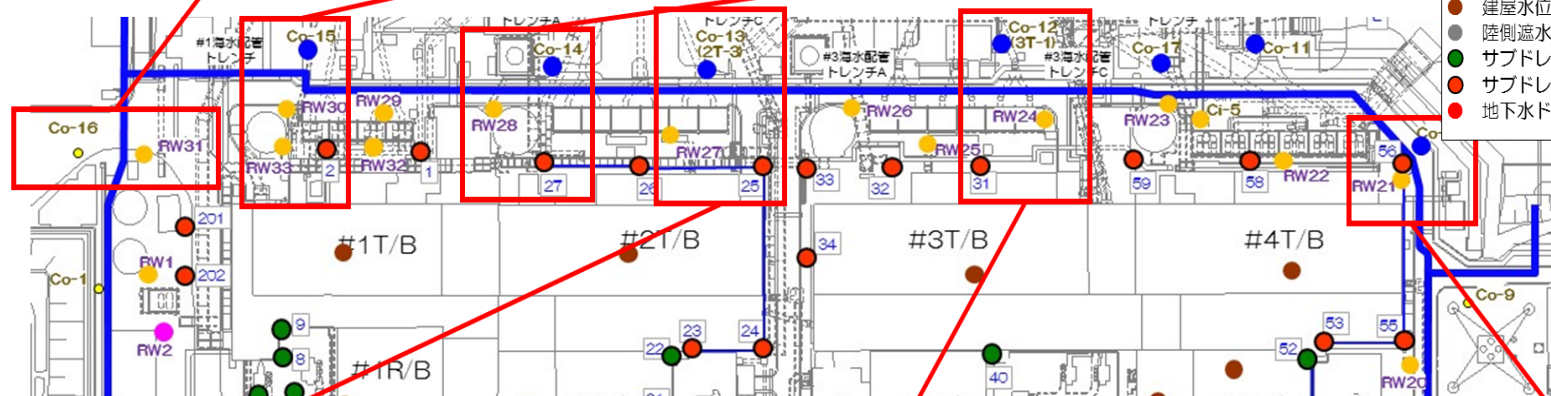


【参考 2】 地下水位・水頭の状況について

【参考2-1】地下水位・水頭状況（中粒砂岩層 海側）

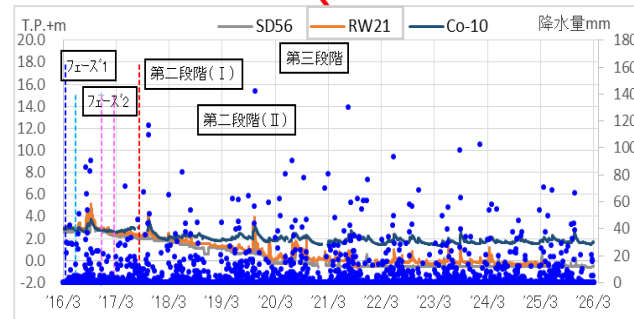
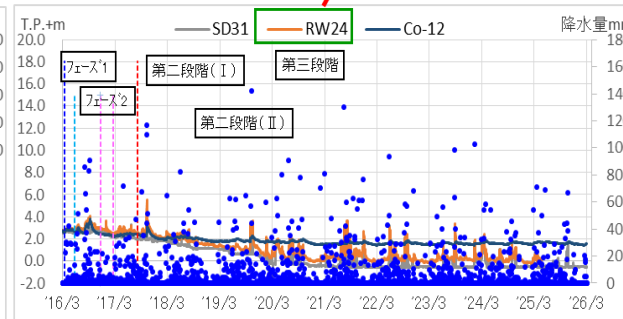
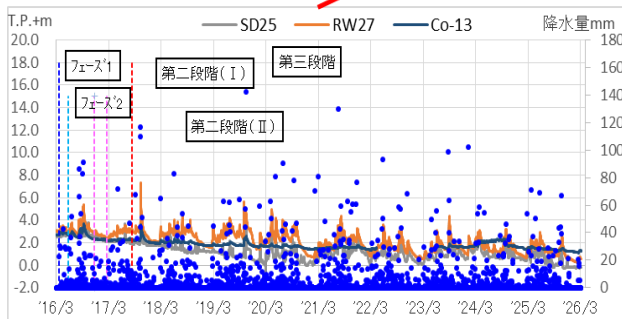


※RW31は、2022/2/2～
2025/1/17期間は、計器故障



- 注水井・観測井（山側）
- 注水井・観測井（海側）
- 陸側遮水壁（海側）海側観測井
- 建屋水位
- 陸側遮水壁（山側）山側水位
- サブドレン（山側）
- サブドレン（海側）
- 地下水ドレン観測井

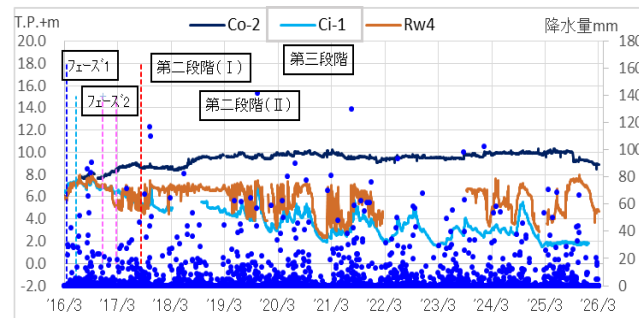
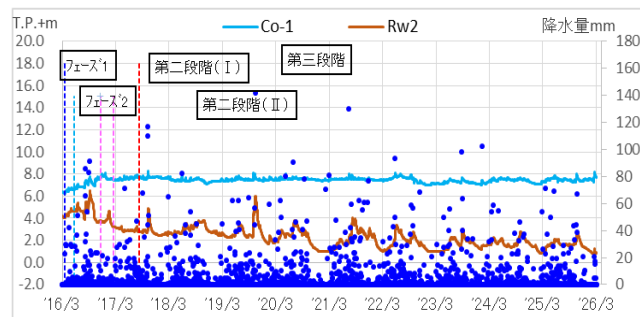
フェーズ1: H28.3/31～
フェーズ2: H28.6/6～
第二段階（Ⅰ）: H28.12/3～
第二段階（Ⅱ）: H29.3/3～
第三段階: H29.8/22～



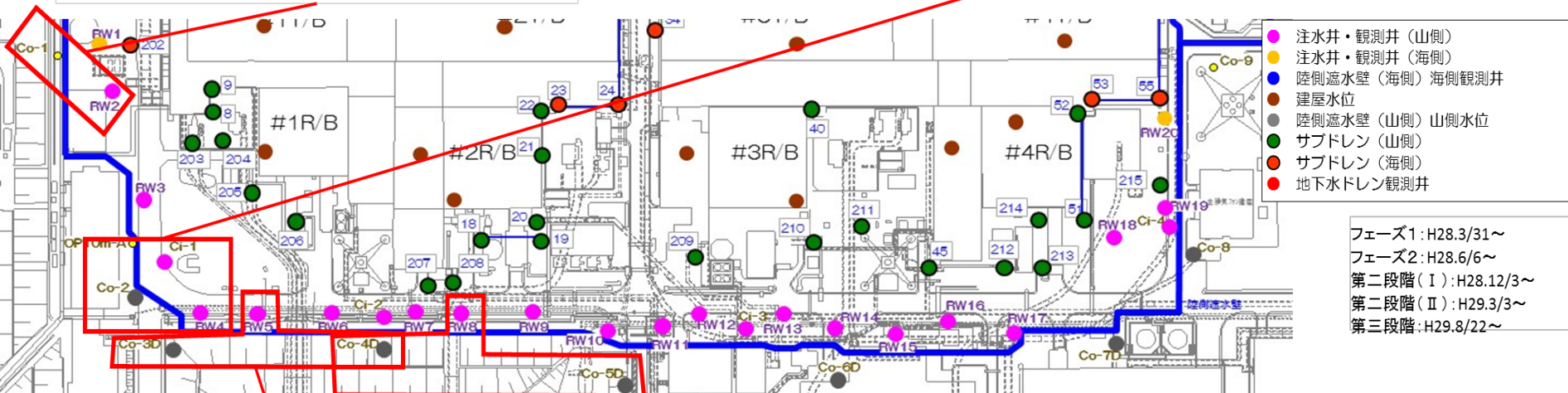
※Co-13は、2022/4/25～2023/6/26の期間は、計器故障

データ ; ～2026/4/14

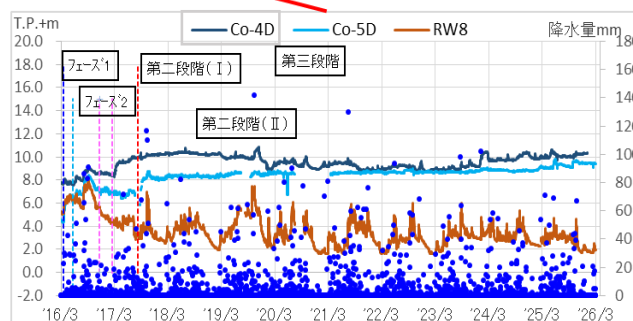
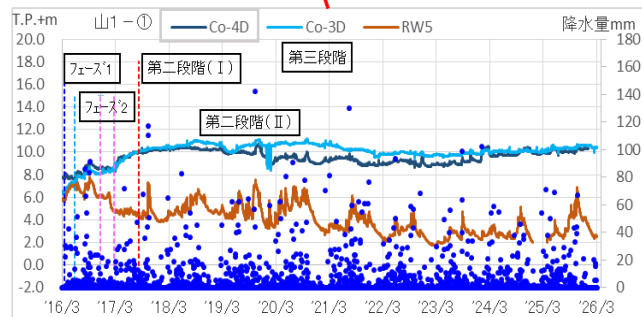
【参考2-2】地下水位・水頭状況（中粒砂岩層 山側①）



※RW4は、2023/3/29~2023/9/20
の期間は計器故障
2025/2/3~ 水位計設置位置変更
により欠測

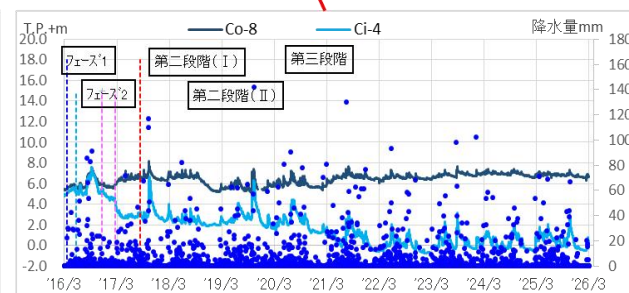
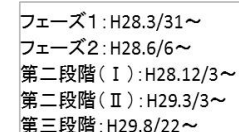
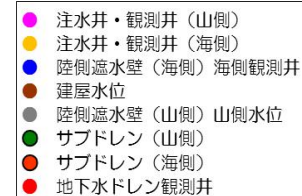


フェーズ1: H28.3/31~
フェーズ2: H28.6/6~
第二段階 (I): H28.12/3~
第二段階 (II): H29.3/3~
第三段階: H29.8/22~



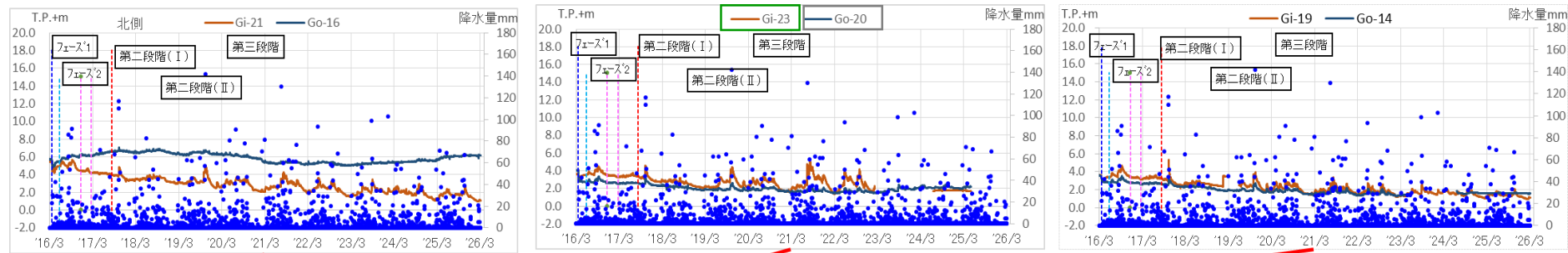
※RW5は、2025/1/4~ 水位計設置位置変更により欠測

データ ; ~2026/4/14



31

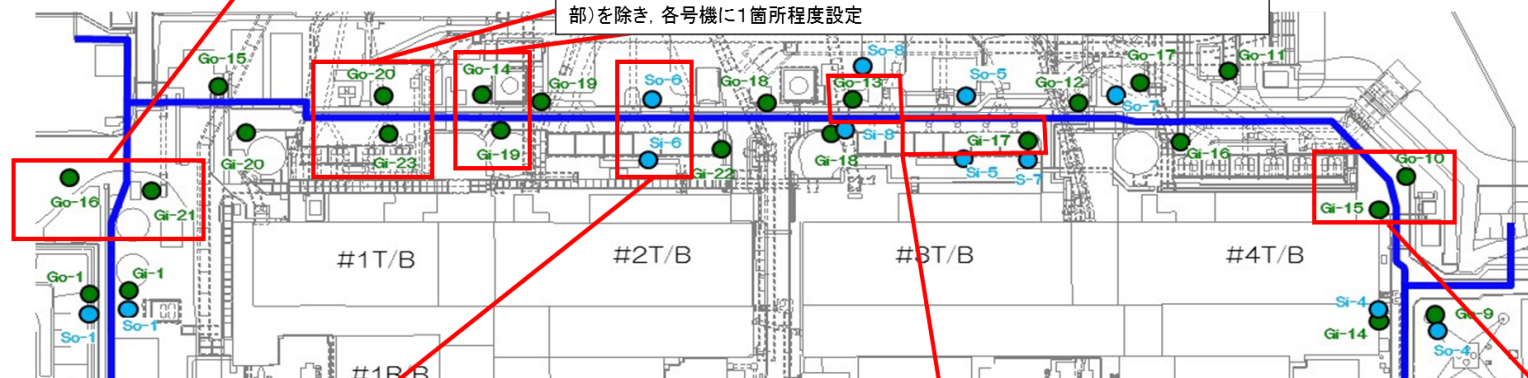
【参考2-4】地下水位・水頭状況（互層、細粒・粗粒砂岩層水頭 海側）



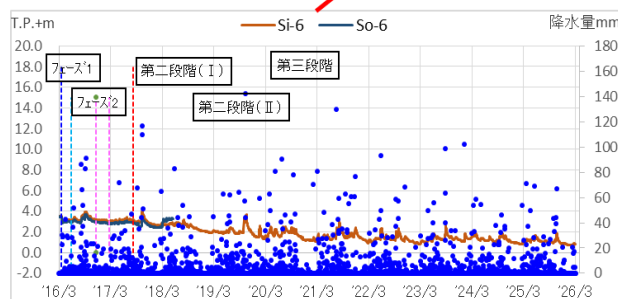
※Gi-23は、2022/2/20～
2024/6/25の期間は、計器故障

海側互層、細粒・粗粒砂岩のグルーピングは、非凍結箇所（各号機海水配管トレンチ下部）を除き、各号機に1箇所程度設定

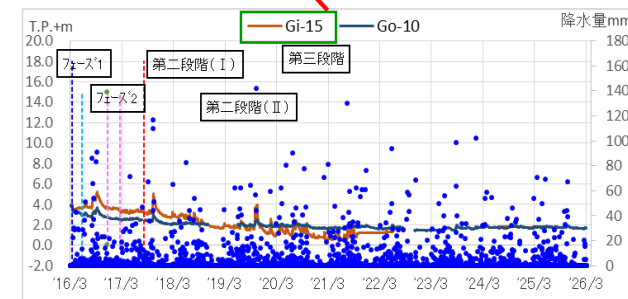
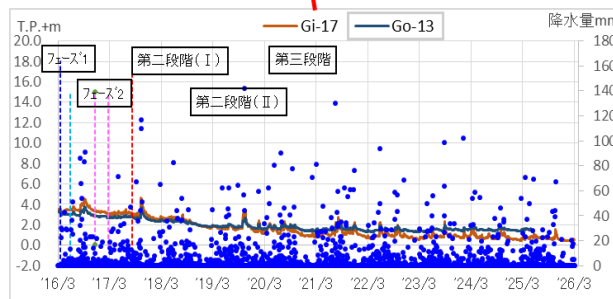
● 互層観測井
● 粗粒・細粒砂岩 観測井



フェーズ1：H28.3/31～
フェーズ2：H28.6/6～
第二段階（I）：H28.12/3～
第二段階（II）：H29.3/3～
第三段階：H29.8/22～



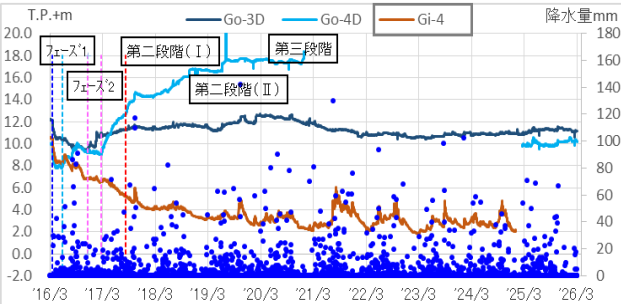
※So-6は、2018/6/1より計器故障



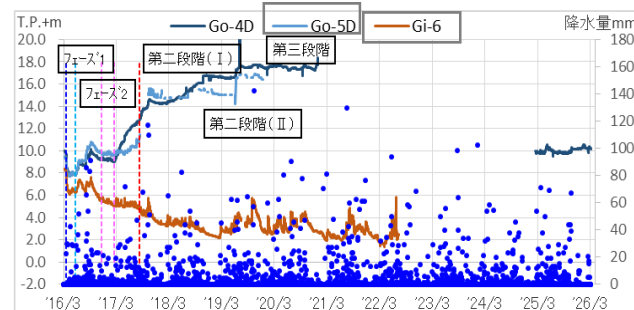
※Gi-15は、2022/7/4～2024/6/25期間は、計器故障

【参考2-5】地下水位・水頭状況（互層、細粒・粗粒砂岩層水頭 山側）

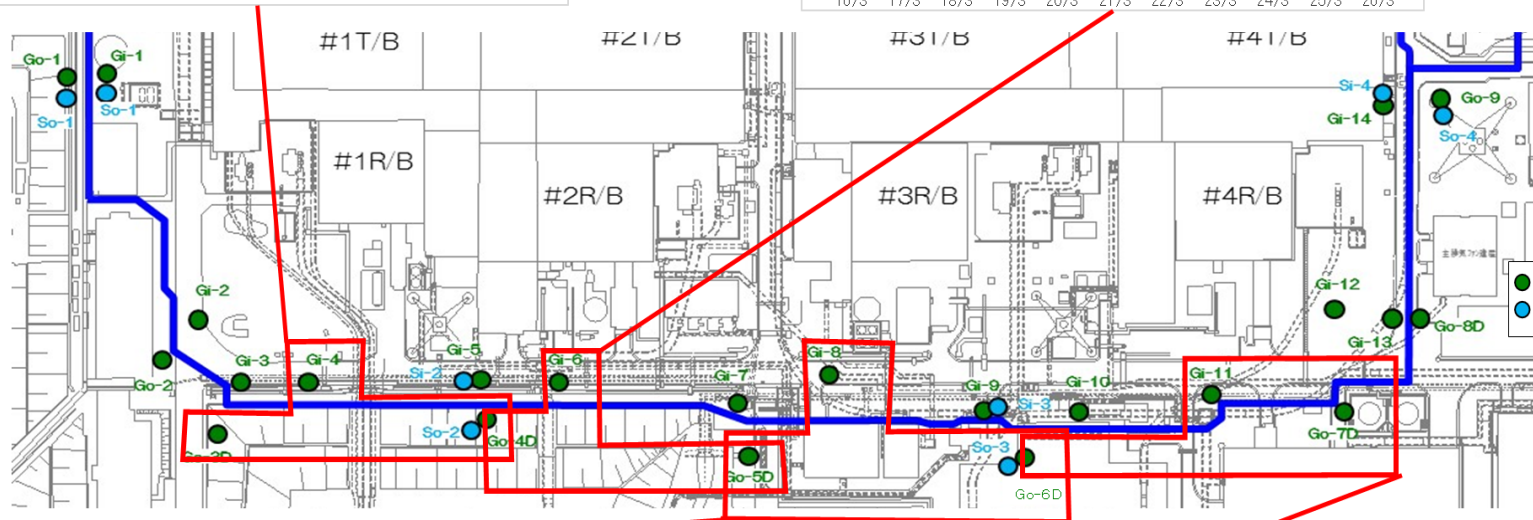
※Go-4Dは、2021/1/11より計器故障



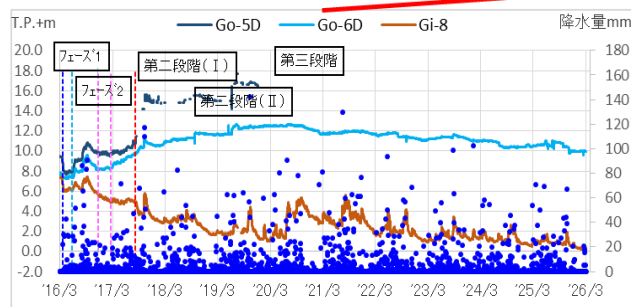
※Go-4Dは、2021/1/11より計器故障



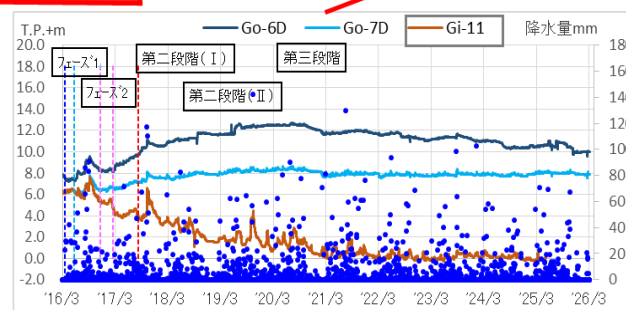
※Gi-6は、2022/7/25より計器故障



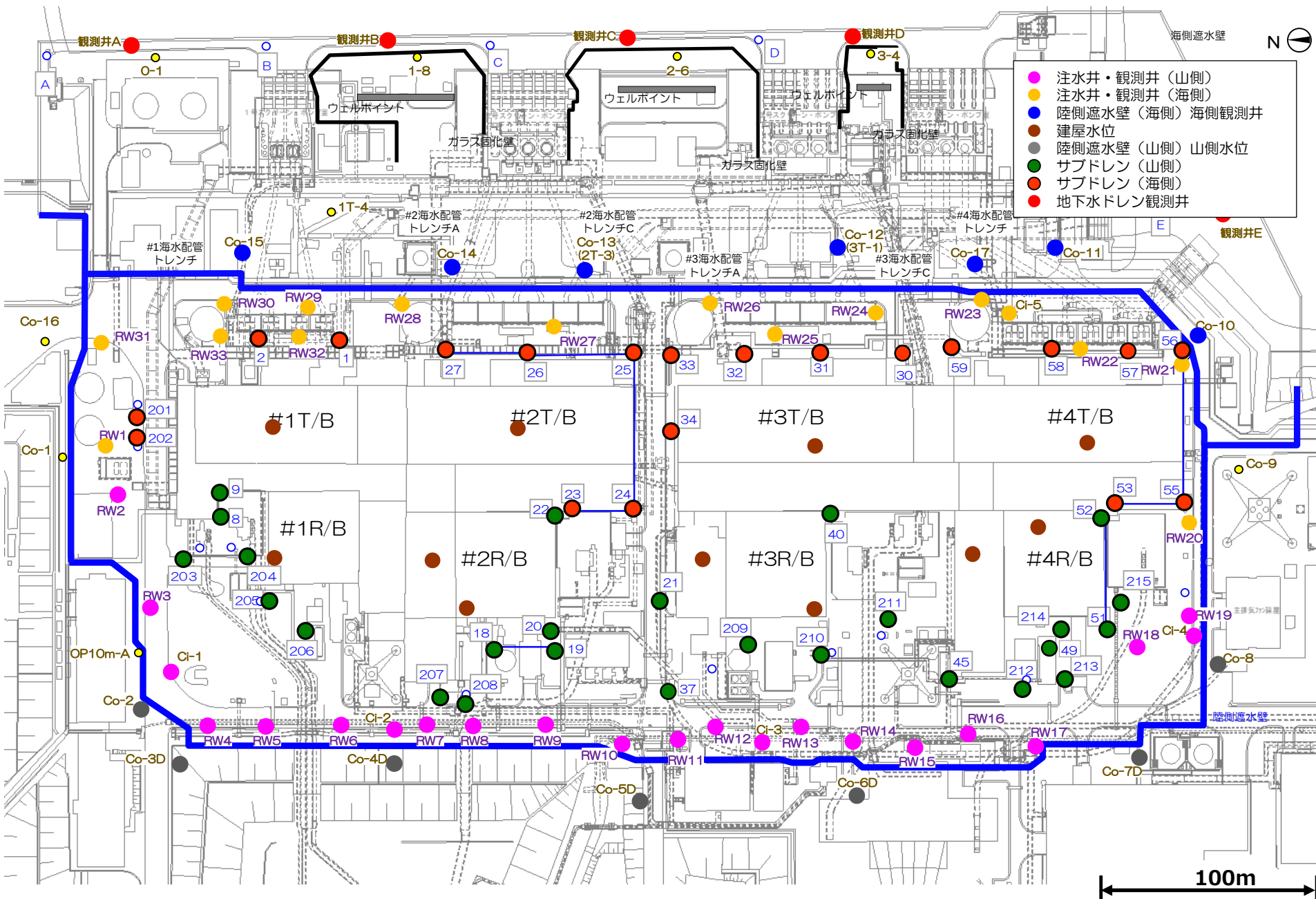
フェーズ1: H28.3/31~
フェーズ2: H28.6/6~
第二段階(I): H28.12/3~
第二段階(II): H29.3/3~
第三段階: H29.8/22~



※Go-5Dは、2019/12/16より計器故障



【参考2-6】サブドレン・注水井・地下水水位観測井位置図



【参考3】 1-4号機建屋深部の外壁配管貫通部

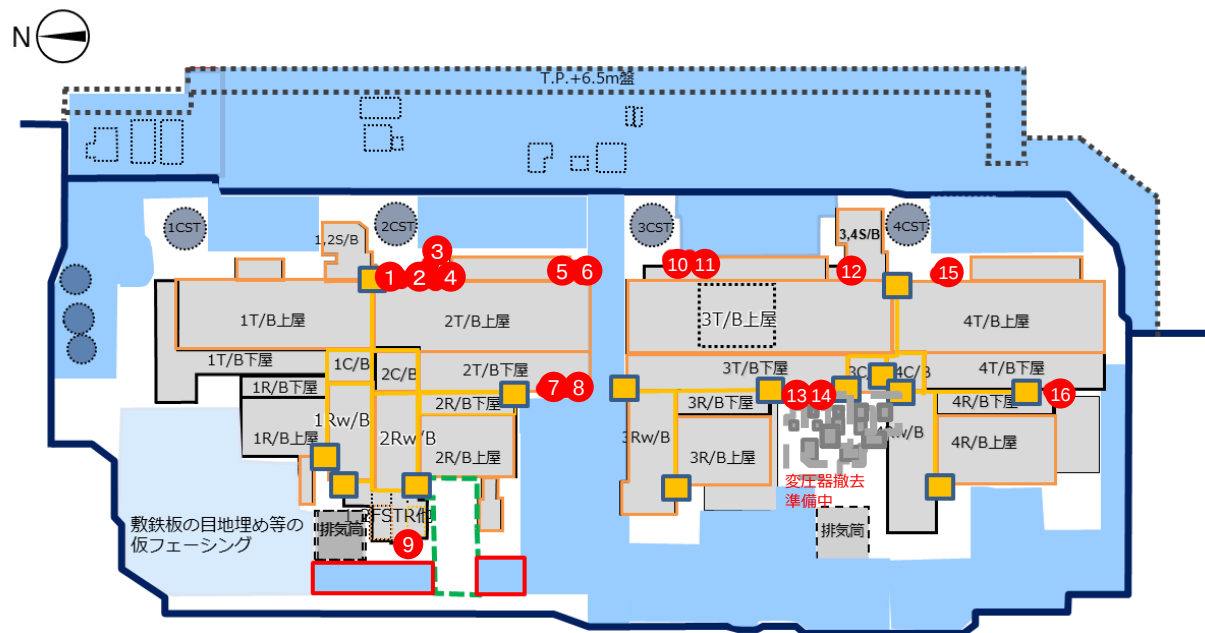
【参考】1-4号機建屋深部（T.P.+2m以下）外壁貫通部一覧

	場所	構造物下端深さ (T.P. m)	形状	大きさ	対応状況と今後の予定
①	2T/B 東側	-1.8	矩形	500mm×500mm	2026年度以降に調査を計画
②		-1.8	矩形	500mm×500mm	
③		+0.9	矩形	1,000mm×1,300mm	2号放射性流体ダクト（止水済）：2019年度完了
④		-1.8	矩形	4,100mm×1,500mm	2号海水配管トレンチ（閉塞済）：2015.6完了
⑤		-1.8	矩形	3,550mm×1,500mm	
⑥		-1.8	矩形	2,250mm×1,500mm	
⑦	2T/B 西側	-1.7	円形	φ50mm	2026年度以降に調査を計画
⑧		+1.2	円形	φ120mm	
⑨	2号FSTR 東側	-1.8	矩形	800mm×1800mm	2号FSTR内部の開口的のため 外周壁の貫通部では無く対策対象外
⑩	3T/B 東側	+2.6※	円形	φ200mm	カメラ調査（2022年度：降雨時期含）により、 にじみ程度のみ確認で大きな流入無し。
⑪		-0.9	円形	φ200mm	
⑫		+2.0	矩形	4,000mm×2,000mm	3号取水電源ケーブルダクト（閉塞）：2024.2完了
⑬	3T/B 西側	+1.1	円形	φ100mm	カメラ調査（2023年度：渇水期、2024年度：豊 水期）により、床面は乾いており流入無
⑭		-1.7	円形	φ50mm	
⑮	4T/B 東側	-1.8	矩形	2,250mm×1,900mm	4号海水配管トレンチ（閉塞済）：2015.4完了
⑯	4T/B西側	+0.4	矩形	910mm×2,000mm	4T/B流入量は少なく、開口は階段室の扉であり、 外周壁の貫通部ではない可能性のため対策対象外

流入量の多い3号機タービン建屋の対策を優先している。

2号機タービン建屋、4号機タービン建屋は、少雨期の建屋流入量は少ない。

※⑩はTP2.6mだが、3号機タービン建屋の流入量が多いため調査対象としている



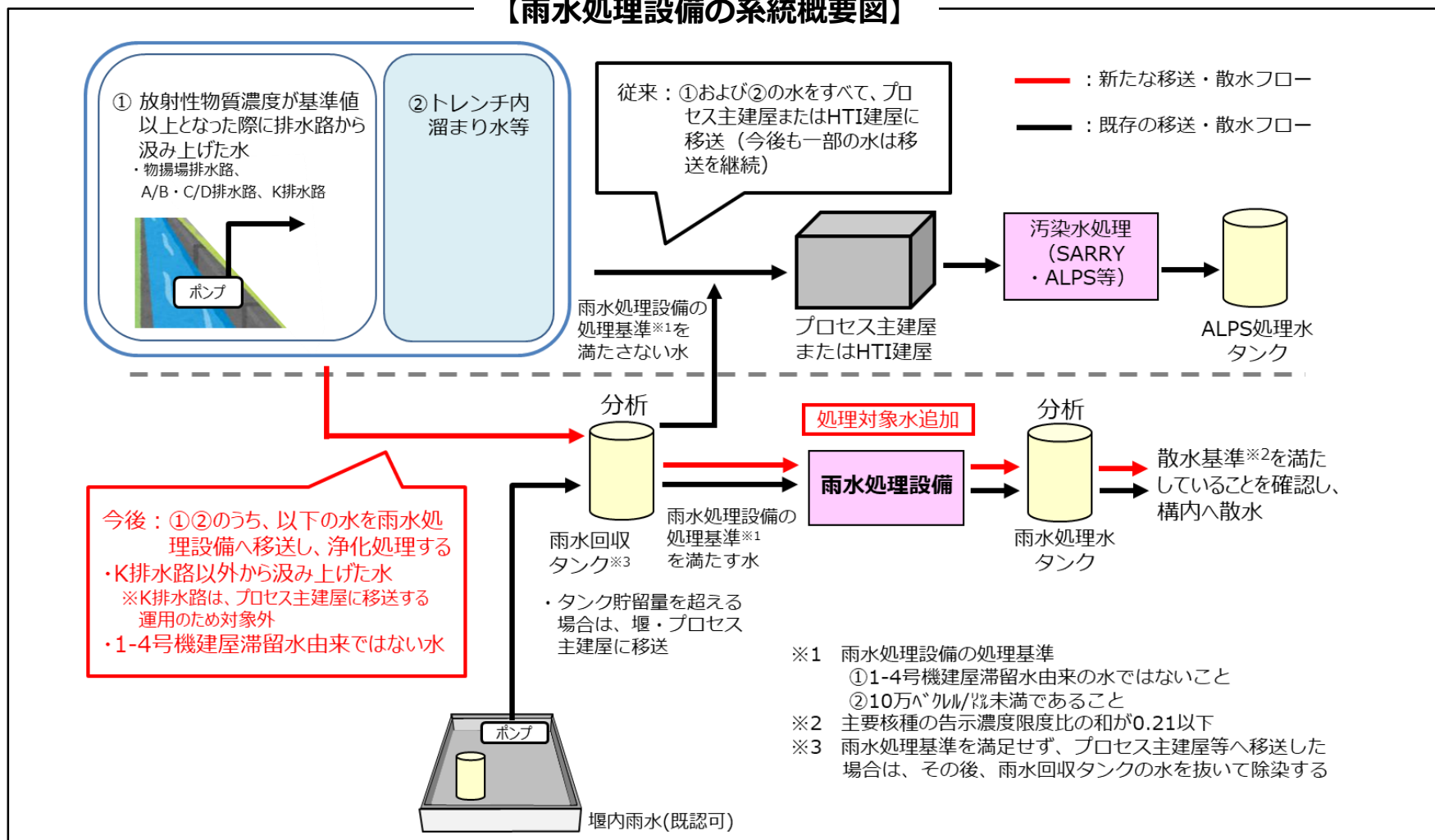
R/B : 原子炉建屋
T/B : タービン建屋
Rw/B: 廃棄物処理建屋
C/B : コントロール建屋

- 深部（T.P.+2m以下）建屋外壁貫通部（16箇所）
海水配管トレンチ（閉塞済み）含む
2号機：9箇所、3号機：5箇所、4号機：2箇所
- 建屋間ギャップ端部（外壁境界部）（14箇所）

【参考4】 雨水処理設備へ移送するトレンチ内溜まり水

- これまで、排水路の放射性物質濃度が基準値以上となる事象が発生した場合、排水路ゲートを閉鎖し、最終的にプロセス主建屋等へ移送する計画となっている。更に、放射性物質濃度が低い構内溜まり水（トレンチ内の溜まり水等）についても、同様にプロセス主建屋等へ移送しており、汚染水発生量増加の一因となっている。
- このため、汚染水発生量の低減を目的に雨水処理設備にて処理可能な濃度※1の水をタンク堰内の雨水処理設備で浄化処理し、構内散水するための実施計画変更を行った（2024年9月17日認可）。2024年11月より、該当するトレンチ内の溜まり水の移送を実施している。

【雨水処理設備の系統概要図】



- 構内トレンチ内溜まり水と同様に、下表に示す建屋滞留水由来の水ではないものは、雨水処理設備へ移送可能な追加対象水（2025年度：約60m³）とし、トレンチ内溜まり水と合わせ約260m³を雨水処理設備へ移送し、浄化処理を実施している。
- 2026年度は、2025年度に計画したが未実施となった『厚生棟周辺のコンテナ内の水』とトレンチ内溜まり水と合わせ約1,200m³を予定している。

雨水処理設備へ移送する追加対象水	発生源及び建屋滞留水由来の水ではない理由	移送量（m ³ ）
2025年度：実績		
覆土式一時保管施設（エリアL）近傍の ノッチタンク内の水	2012年2月に覆土式一時保管施設（エリアL）の建設で掘削した際に発生する地下水を処理するために使用したノッチタンクであり、瓦礫等を保管したことはない。その後、降雨が浸入したことも想定されるが、建屋滞留水由来の水が含まれる水ではない。	約20
5・6号機サブドレン移送配管の横断トレンチ内の水	5・6号機サブドレン移送配管を道路横断箇所に敷設するために設置したトレンチ内に雨水が流入した溜まり水である。当該の道路横断トレンチはT.P.+33.5m盤に新たに設置したもので、1-4号機建屋と接続もなく、建屋滞留水由来の水が含まれる水ではない。	約40
トレンチ内溜まり水	放射能濃度：30～230 Bq/L	約200
2025年度：合計		約260
2026年度：計画		
厚生棟周辺のコンテナ内の水	企業厚生棟プレハブ休憩所の空間線量を低減させるため、休憩所の周囲にコンテナを設置し、遮蔽のためにコンテナの中にくわす過水系統の水を入れたもの。当時、タンクは新品（蓋付き）を使用しており、ガレキ等の内容物も入っていない。	約850 （コンテナ19基分）
トレンチ内溜まり水	放射能濃度：27 Bq/L	約350
2026年度：合計		約1,200